

# 第1部

## 平和祈念文集



<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

### 私の東京大空襲体験—昭和20年3月9日～10日—

秋山 恕男（泉 在住）1936年生

当時、私は東京市横川国民学校3年生で10歳でした。3月9日の夜、警戒警報と空襲警報のサイレンが交互に鳴り響いていました。その都度、私の家族は家の電灯を消し、防空頭巾を被り、それぞれの身の回りの品をもって、家の前に掘った簡単な防空壕に入り、身を寄せ合って警報解除を待ちました。父は町内の警防団員として、サイレンが鳴るたびに外に飛び出して行きました。その内に、サイレンは鳴り止むことがなくなりました。飛行機の轟音が大きく、近くなったと思ったら、上野、浅草方面の空が赤々と染まり始め、その火の勢いは私たちの住む本所に徐々に迫ってきました。

ボーイング社の爆撃機B29による東京大空襲の始まりでした。先ず照明弾が投下されると、灯火管制で真っ暗な街が一瞬にして真っ昼間のように照らし出されました。そこに焼夷弾が投下されると、あっという間に火の手が上がり、猛烈な勢いでこちらに炎が迫ってきました。この夜は北風が強く、それに煽られて瞬く間に火の勢いは広がりました。そのとき、父が外から戻ってきて、「もう此処にいては危ない。うらの横川国民学校に逃げよう！」と言いました。父、母、姉、兄、弟と私の一家6人は、急いで、学校の正門から廊下伝いに1階の教室に避難しました。各教室は、次々に避難してくる人達で間もなく一杯になりました。

学校に避難して1時間くらいして、廊下の窓から我が家の方角を見ると、一面に火の手が上がっていました。そのときは、「ああ、いよいよ駄目か…」と、子供心に実感しました。暫くすると、校舎内にも火の手が入ってきました。廊下の天井に張られた電灯線が燃えだし、白い煙が廊下を流れるように入ってきました。一旦火の手が入ると、通風口のような廊下は火の廻りが早いようでした。すぐに周囲が見通せなくなりました。恐怖の悲鳴と「屋上へ逃げよう!」、「講堂の方がいい!」などの大声が飛び交いました。私の一家は、人々に押さ



れるままに廊下伝いに裏門の方に向かい、校庭へと逃れました。このとき家族はばらばらになりました。警防団員の父は役目柄あちこち動き回っており、弟を連れて兄と姉ははぐれてしまいました。私は母に手を引かれ、人々の流れに押されて廊下を進みました。途中、裏門の鉄扉付近では、外から避難してきた人が「中に入れてくれ!」、「助けてくれ!」と叫び、中の人々が「駄目だ、開けると火が入る!」といい争う怒号が聞こえました。その悲痛なやりとりを背にして、廊下を出て右に曲がり校庭に出ようと思いました。その瞬間、私は後からくる人々に押し倒され、その下敷きになりました。後で母に聞かされたのですが、私は一瞬意識を失いました。母は私の手を離さず、思いっきり引っ張り出してくれました。人波に押し出されるように校庭に出て、目の前にあったプールに無我夢中で飛び込みました。このとき、校庭の広場の方に逃げる人々もいました。

プールには1 m程の水がありました。プールの中から校舎を見上げると、どの教室の窓からも真っ赤な炎が吹き出していました。その炎から火の粉が、我々の上に降り注いできました。大人の人達が近くにあったバケツや桶で私達の防空頭巾の上から、代わる代わる水をかけてくれました。頭上は炎が吹き出し、身体は冷たい水の中という状態でプールの中で、3～4時間過ごしました。校舎内からの火の勢いも徐々に弱まり、空も白々と明け、周囲の状況も少しずつ見えてきました。やっとの思いでプールから這い上がり、その縁に座り込みました。そのときふとプールの水面を見ると、ふかふかと浮いているものがありました。目を凝らして見ると、それは長時間冷たい水の中にいたために息絶えた幼子や老人の姿でした。プールから出て近所の顔見知りと会っても、皆ただ無言で茫然自失ぼうぜんじしつの状態でした。幸いなことに、私の家族6人は全員が無事であることが、プール周辺で確認できました。

我に返ると、ずぶ濡れになった身体に寒さが襲ってきました。よろよろと校庭に出ると、助かった人達は何か燃え残りがある場所に、暖を求めて集まっていました。その周囲を見渡すと、焼死した人々がそこ此処に転がっていました。

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

一見では、それが大人か子供かも判別できない有様で、しばし茫然<sup>ぼうぜん</sup>と立ち尽くしました。その後、すっかり焼け野原となった我が家の跡を見に行きました。建屋は跡形もなく、消し炭のような残骸だけが、煙を上げてくすぶっていました。僅かに金庫と水道管だけが原形を留めていました。さらに隅田公園へと向かいましたが、その途中は筆舌<sup>ひつぜつ</sup>に尽くしがたい惨憺<sup>さんたん</sup>たる情景でした。

大空襲の一夜が明けた3月10日の夜は、隅田公園の川岸にあった貸しボート屋でお世話になりました。そこから見えたのは、隅田川の対岸にある浅草松屋デパートの窓からまだ白煙が吹き出している光景でした。翌日、私達一家は、重い足を引きずり、父の親戚を頼って越ヶ谷へと向かいました。終戦70年に際し、自分の体験の記憶を書きとどめ、記録として残したいと思います。

### 私の戦争

安楽 嘉子（青山台 在住）1937年

昭和12年1月生まれの私は、東京大空襲、学童集団疎開、終戦と昭和20年は大変な年だった。7歳の秋、物理学校の生徒だった母の弟の叔父が出征した。物理学校の制服、制帽姿で、「出征」のたすきをかけて、敬礼をして征く叔父を送った時、ヒデさん（叔父の名）ホントウハ イキタクナイノダナと子供心に直感した。思えばあの姿がヒデさんを見た最期だった。昭和21年の夏、ヒデさんは白木の箱に入って、ビルマから帰還した。簡素なお葬式をしたあと長兄の叔父が「最期のお別れだ。開けてみよう。」と言って開けてみたら、どこにでもあるような小石が一つと「井上英雄之霊」とある一枚の紙片だけだった。「なんだ！ヒデの命は小石なのか！」温厚実直な叔父の怒声をはじめて聞いた。

私は東京四谷に生まれ、四谷で育った。父は東京駅八重洲口に本社のあった鉄鋼会社に勤め、両親と兄と姉、父の長姉にあたる叔母と私の6人家族だった。しかし、19年の半ば頃より、父は鉾山の所長となって現場に赴き、兄は中学

生だったが、学校ごとの疎開で長野に行き軍需工場で働き、姉は学童集団疎開で山梨へ行っていた。四谷の家は母と叔母と私で守っていた。空襲は毎夜あり、防空壕に逃げ込んでいた。

昭和20年3月9日の夜から朝にかけて、東京に大空襲があった。いつもは灯火管制で東京の空は真っ暗だったが、この夜は地上の火災が夜空を照らし夕焼けのように真っ赤だった。母の顔も叔母の顔も隣の正ちゃんの顔もよく見えた。焼夷弾を積んだ爆撃機B29は太平洋上から連隊を組んで入って来て、空に十字路があるかのように、整然と2～3機に分かれて、まだ燃えていないところに焼夷弾をばらばらと落とす。その地上の新たな炎が火柱となって立ちのぼる。役目を果たしたB29は勇然と去っていった。のちの資料によると、この夜の爆撃機B29は344機で焼夷弾を投下し、死者約10万人、焼失戸数27万戸、東京下町の約40%、40平方キロメートルが焦土と化した。

やっと白々と夜が明けた頃、空襲警報は解除となったが、ほとんど一睡もせずに登校した。その途中で下町から歩いて来た罹災者りさいとあった。顔はすすで真っ黒、ぬれた毛布を防空頭巾の上にかぶり黙々と歩いて来た母子3人。声はかけられなかったが、なんとも気の毒だった。

学校はがらんとして妙に寂しかった。受持ちの阿部先生が見えて、出席を確認し「今日はこれでおわります。学校においてあるものは、全部持って帰りなさい。明日からのことは、あとでお家に連絡します。お家でお勉強をしたり、お手伝いをしたりして待っていてください。」と言ひ、ひとりひとりの席のところに来て「お元気でね」と言いながら、頭をなでてくれたり、握手をしてくれたりした。「四谷第三いい学校。あがってみてもいい学校。」と唱いながら自慢していた鉄筋コンクリートの数少ないモダンスクールとも、阿部先生ともこの日が最期になってしまった。

それからすぐ3月27日に私たち2年生も集団疎開に行くことになった。母の一張羅の着物（母の着物はヤミ米を買うために、ほとんどなくなっていた）をつぶして作ってくれた小さめのふとんを送って疎開した。行くまでは姉とも逢えるし友達もいたし、少しはしゃいでいたが、その夜からあまりに違う現実を知り、私はたちまち話さない、笑わない変な子になってしまった。親への手

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

紙に「げんきです」としか書かない子で、夜になるとふとんの中で声を出さずにさめざめと泣いていた。

5月には四谷・新宿方面が全部焼けてしまい、私たち疎開児童もみな罹災<sup>りさい</sup>家族になってしまった。四谷の家が焼けてしまったので、母たちの住む家もなく、とりあえず母の実家へ身を寄せることになった。西八王子の家にしばらく居て長野県の小海村に疎開し、そこで終戦を迎えた。玉音放送も聞いていたが、言葉がむずかしく、私には意味不明で父に解説してもらった。

その後22年に5年生になった時、山梨<sup>くさかべ</sup>の日下部に引越した。ここからが、私の戦後であった。小海より気候も温暖で、山に囲まれた盆地ではあったが平野は広く、青々とした木々に囲まれ、心も晴れ晴れとした。私の無口病も治り、元気はつらつな子になった。なによりよかったのは、担任の先生が「新しい憲法」の話をよくしてくれたことだ。戦争放棄、平和国家の建設、男女平等、民主主義、基本的人権の尊重、婦人参政権…等々漢字の並ぶ難しい言葉が多かったが、内容が豊かで胸がドキドキした。争いごとが起きても話し合いで解決すること。対立する意見がどうしても折り合わない場合は第三の意見を創り出すこと。母がはじめての選挙に父と行って、意気揚々として帰宅した日のことなどを思い出す。

### 日の丸は踏まれて～10歳で体験した敗戦直後の満洲～

飯牟礼 一臣（湖北台 在住）1935年生

その時、私は満州国奉天<sup>しんよう</sup>（瀋陽）国民学校の4年生だった。昭和20年8月15日、戦争終結のラジオ放送が終わると同時に現地の人々が街中に溢れた。爆竹の音が鳴り響き、日の丸は踏みにじられ、あっという間に中国の国旗「青天白日旗」がはためいた。おそらくその数、万を超えるものであったろう。これほどの旗を1日で作ることは不可能である。日本が負けることを知って事前に準備<sup>ぼうぜん</sup>していたことを物語る。私はただ呆然と見ているだけだった。

この日を境に中国人と日本人の地位は逆転した。役所も警察も日本人は放逐

され、部課長から末端まで全員が中国人となった。

官吏だった父も失職。収入を求めて父はチリ紙の行商、私は街角でキンツバを売った。ある日のことだった。汚い中国服を着た男がキンツバを手にした。私は感謝を込めて「謝謝」と頭を下げた。黄色い歯をむき出しにして男はニタリと笑った。「オイシクナイネ」といって、食べかけのキンツバを放り投げると金も払わず去って行った。子どもの私は抗議する術<sup>すべ</sup>もなく、じっと涙をこらえ道路にうずくまるしかなかった。爾来70年、80歳の傘寿を迎えた今でも私はキンツバを口にしたことがない。あの10歳の時に受けた屈辱感<sup>さいな</sup>に苛まれるからである。

奉天には色々な軍隊がやって来た。蒋介石<sup>しょうかいせき</sup>の国府軍、共産軍の八路(パーロ)、ソ連軍だった。一応規律の守られた中国兵と違い、ソ連兵は自動小銃で人を脅し、時計を強奪したり、女性を襲ったりした。私の家にも夜中にソ連兵が押し入って来た。母は裸足で窓から飛び降り難を逃れたのである。

夏が過ぎ、秋風が吹き、やがて冬が来た。北満から命からがら逃げて来た日本人開拓団の人たちが次々と奉天にやって来た。衣服はボロボロ。下着まで剥がされ麻袋を被っている人もいた。私たちの小学校は避難民収容所になった。教室の窓ガラスは全て持ち去られ、ムシロ<sup>しの</sup>で雪を凌ぐしかない。満州の冬は氷点下30度。冷凍庫の中と同じ寒さになる。寒さと栄養失調で次々と凍死してゆく。何ヶ月も風呂に入っていない避難民は頭も体もシラミだらけである。人が死ぬとシラミは一斉に暖かい血を求めて生きている隣の人に移動する。サワサワと不気味な音がするので、身の毛のよだつ思いがするという。

収容所には「子ども育てるよ」と中国人が買いに来る。せめてこの子だけでも生きていて欲しいと中国人に預ける親も少なからずいた。

あれは確か雪の降り積もる真冬のことだ。母が近所の奥さんに「お風呂から上がって着物を着たら、あまりにも美しい姿なので思わず涙が出ました」というのを聞いた。10歳の男の子にそれが何を意味するのか分からない。我が家から母の着物を着て行った避難民の女性がソ連軍の慰安婦として徴用されたのだと知ったのは高校生になってからであった。

大学時代、開拓団員の悲惨な運命を描いた小説を書いた。戦争は武器を持つ

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

で戦う人間だけでなく、銃を持たない無辜<sup>むこ</sup>の民をも死に追いやることを訴えたのである。小説は大学の文芸賞を受賞。20年前から舞台劇にして上演も続けている。原作の小説は「早稲田大学博物館」で永久保存されている。

戦争の犠牲になるのは女性や子供ばかりではない。副県長や警察署長など行政の責任者も“人民の敵”として死刑に処せられた。暫くして奉天省の幹部だった父にも出頭命令が届いた。「この子を立派に育ててくれ」と死刑を覚悟した父は私の頭をなで、母に別れの言葉を告げて出て行った。官舎中が父の運命を案じて静まり返っていた。母は目を瞑り端然と正座したままであった。夜中、馬車の音がした。父が帰って来た！話は満州の復興だったと言う。経済が安定するまで日本には帰さない、ずっと満州に留まれと命令された。父は断ったが、無罪放免となった。

翌年7月。日本への帰国命令が出た。持って帰れるのはリュックサック1つの衣料品と1人千円の現金だけ。港までは石炭や牛豚を運ぶ無蓋<sup>むがい</sup>列車。雨が降るとズブ濡れになる。

日本に着いた。郷里の鹿児島市は見渡す限りの焼け野原。師範学校の校長をしていた祖父の家は瓦と石が転がっているだけだった。

満州から持ってきた母の着物は主食の芋と化け、1人千円の現金もすぐ消えた。貧乏のどん底で靴も買えず、小学校には裸足で通った。人間らしい生活に戻るのは昭和25年の朝鮮特需以降のことである。

戦後70年には色々な思い出がある。しかし、郷愁であってはなるまい。私は戦争の惨状<sup>さんじょう</sup>を小中学校で講演、舞台でも演じている。戦争を知らない世代に向けて、これからもささやかな語り部の1人として人間同士が殺し合うことへの怒りと平和への喜びをいつまでも訴えて行きたいと願っている。



## 戦後70年に想う

石井 英朗（布佐 在住）1935年生

昭和20年8月15日。あの日の正午は暑く乾いた快晴であった。布佐国民学校4年生の私は、近所から集まってきたお年寄りの方々と共に、自宅のラジオから流れる天皇陛下の不思議な声を聴いた。誰ひとりひとことも話さずひっそり帰っていく様子からも、この戦争は負けたんだと実感した。

すでに学校の校庭はイモ畑になっていたし、講堂には軍人さんたちが起居ききよしており、登校路に面した宮作台の東南の先端には、回転式の対空機関砲が配置されていて、訓練中の兵隊さんたちの真剣な動作や声にも接していた。

昭和20年といえば、子供たちにも米軍の九十九里浜上陸のうわさは届いていたし、私たちに「元気か」と声をかけてくれる中年の兵隊さんたちに頼もしい親しみを覚えていたのであった。

父は軍に入隊していたし、祖父は食糧配給営団の要職を占めて、千葉や成田に出ていたから、日常的な家族は祖母と母と長男の私と弟たちだけで、その母ですら草深（いま、印西ニュータウン）の飛行場での勤労奉仕によく出かけていた。学校も男は年配者のみで、学級担任はすべて女性の先生でした。

空をB29が編隊を連ねてサイパン島に帰航する風景が日常行事のようになり、空襲警報が解除されて自宅の離れ屋敷の防空壕から出ると、船橋から京浜方面にあたる西南方の夜空が黄紅色の帯のように光っていたことがいくどもあった。

何よりも強烈だったのは、3月10日の東京大空襲のしばらくのちかと記憶するが、足立区鹿浜の母の実家に祖父（鈴木源平）の葬儀に赴くべく、母と共に布佐駅から上野行の汽車に乗ったときのことである。発車してすぐ、グラマン戦闘機の機銃掃射に直面したのであった。あの急降下のヒューという鋭いエンジン音とバリバリッという機関銃の音はいまでも忘れ得ない。幸いにして蒸気機関車は、成田線でも急斜面をなすネガラと呼ばれていた崖に沿って停車し、気まぐれな攻撃はそれ1回のみで無事だった。やがて列車が北千住を過ぎて南千住、三河島、日暮里に至ると、広大な地域が空襲によって燃え盡つくされ、ポツ

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

ポツと焼け残った金庫が幾百となく点在する風景が続いていたことが、脳裏にやき付いている。

こうした異様な状況は、食べ物が貧しくなっていたとはいえ、田舎の軍国少年にとって消し難い何かをインプットしていたのであろうと今にして思う。それが敗戦を意外と素直に受けとめたことに接続しているかと考えた。

軍国主義の日本を破砕するため、アメリカは徹底的な物量作戦を展開した。この大戦で日本国民は300万に達する死者を数えた。1929年秋のアメリカの大恐慌に端を発して、30年代には世界不況が深刻化し、通貨システムも金本位制から管理通貨制と変化して、輸出促進のため為替戦争という為替切り下げ競争を繰り広げ、はてはイギリス・ドイツなど主要国を核とする世界経済のブロック化が進展していた。

日本はいわば欧米列強に対抗する“最後の帝国”として、「大東亜共栄圏」というブロック形成を企図したのでした。イギリス・フランス・アメリカなどがこれを許容しなかったことから、つまりは大戦に至ったという基本的な流れでした。

緒戦<sup>しよせん</sup>は一定の軍事的成功を見たものの、長い補給線を確保できず、莫大にして無意味に近い生命や財の損失の上に1945年8月15日を迎えたことを、私たちはいま歴史に質して問うことが大切かと存じます。

この夏、私は米軍が強大な装備をもって上陸してきた沖縄戦に関する本を幾つか読みましたが、集団自決のトラウマなど、改めて日本国民である沖縄の人びとに対する想いを確認できました。

1648年のヨーロッパ宗教戦争に終止符を打ったウエストファリア条約から発する近代国民国家体制が、現今の国際社会の基本的な構図ですが、和戦の決定権を持つそれぞれの主権国家のもとで、いまなお、万という単位を超える核兵器や大型ミサイルが対峙している状況にあります。

いまや制度疲労を露呈している国家システムを相対化し、狂気を必然とする戦争を阻止することはもちろん、平和とは人類の持続的で安定的な生活秩序であることの再確認が不可欠であります。

私はこの夏79歳です。もはや身に覚えのある戦争や戦後の体験というもの



は、枯渇しつつありますが、若い世代のみなさんに、いわば世界市民としての自覚のもとで、一方である著名な哲学者カントのいう＜世界共和国＞の理念を抱き、いま一方で＜地域という共同体＞の再構築という使命を共有して、それぞれ生き甲斐のある生活感覚を工夫し、磨きあげて下さるよう心から希望する次第です。

### 東京大空襲の記憶

岩崎 孝次（つくし野 在住） 1931年生

戦後70年が過ぎた今、84才の私は1945年3月9日のこの時、中学2年生だった。家は東京都深川区平井町（現在の江東区東陽町）の煙草屋で、両親と妹の4人暮らしだった。私は近くの都立化学工業学校に通っていたが、この日は学校近くの大島製鋼に動員されていた。正門前で隊列を整え、行進しながら工場に出入りしていた。仕事は、工場に着いた船から熔鉱炉用の耐火煉瓦を肩に担いで倉庫まで、皆で競争しながら運んでいた。私の家は、電車通りの曲り角にある東陽小学校と隣の女学校から西に向かって1つ目のT字路の右角だった。道を挟んで西隣は床屋、道の南側の通りには米屋、酒屋、足袋屋、駄菓子屋等があり、1本北側の通りには風呂屋や煮豆屋、それに焼き芋屋もあった。更にその北側には筏いかだが浮かぶ掘割があり、製材所では電動で材木を切る音がしていた。電車で北へ向かうと15分程で錦糸町駅、逆方向を右折して西へ向かうと、洲崎、富岡八幡、門前仲町を経て永代橋を渡り30分程で東京駅に到着した。

東京大空襲の夜（陸軍記念日前日）、2階で寝ていた私は、下から呼ぶ父の声で目を覚まし、西側のガラス戸を開けて外を見ると、火の粉が風に舞って赤い雪のように夜空一杯に拡がっていた。私は吃驚びっくりして下へ降りた。家の前の通りには、今まで見たこともない大勢の人達が、後から後から道一杯に西の方から学校の方に向かって急いでいた。リヤカーや大八車に荷物を載せ、中には1本

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

のロープを握って1列に歩く人々の姿も見えた。父の話だと、門前仲町の方から来たとの事であった。私は父と2人で火叩きを振り回して、家の周りの火の粉を叩いて消していた。家の裏の路地には火の粉がどんどん溜まって、キリがなかった。

気が付くと周りには誰も居なくなっていた。父は唐草の風呂敷を背負ってトランクと荷物を両手に持ち、2人で学校に向かった。学校の前の十字路までくると、風が激しく舞って足を取られ転びそうになった。4階建て鉄筋の小学校の正門から中へ入ろうとしたが、既に大勢の人で中へ入る事が出来なかった。そこで入るのを諦め防空壕を探したが、穴という穴は何処も人が一杯で入れなかった。眼の前に油脂焼夷弾が落ち燃え上がったが、音の記憶もなかった。遠くで馬の嘶いななく声も聞こえたが、既に頭の中は朦朧としていた。私達は、大勢の人達が座り込んでいた電車通りの曲がり角に辿り着いた。隣にいた女の人から「燃えてますよ」と声をかけられ、私は力なく左手で自分の上着のポケットの辺りを手で叩いて火の粉を払った。

東の方を見ると火焰が吹き荒れていたが、時々その中に飛び込んで行く人がいた。私は父に「行こう」と言った。迷っている父の手を掴んで煙の中を走った。2人の体は風で転がされ、橋の欄干で停まった。振り返ると今まで居た場所は煙で全く見えなかった。私は父が背負っていた荷物を捨てさせ、一目散に走って汽車会社のブロック塀に辿り着いた。塀に背中を付けて足を投げ出し、目の前で燃える消防自動車をぼんやり見ている。長い塀には大勢の人達が居たが、皆疲れ果てた様子で無言だった。やがて明るくなったので、さっきまで座っていた電車通りまで戻ると、其処には多くの焼死体が重なりあって倒れていた。

小学校で、防空壕の中で一晩中、火と戦って助かった母と5才の妹に再会した。母達は逃げる途中、「煙草屋のおばさん！」と声をかけられ、防空壕に入れてもらっていた。講堂やプールで多くの人達が亡くなって居ると聞いたが、私

は見に行く事が出来なかった。我が家の前まで戻ると見渡す限りの焼野原で、煙突と金庫が所々に見えるだけだった。家の2階にあった私の本も灰になっていたが活字が読めた。手で払うと飛んでいった。翌日、錦糸町も亀戸も全滅との事で南房総へ行く為、私は小さい妹を負い新小岩駅まで家族4人で歩いた。途中、橋の周りに衣服を着けたまま亡くなった人達の遺体の山を見て、始めて感情が込み上げ悲しくなった。

振り返ると、直接戦争で地獄を経験した先輩や、東陽小学校の友達も少なくなり、戦後生まれの人の方が多くなった現在、この貴重な体験を、過去の話と終わらせる事なく1人でも多くの人に伝えたいと思う。原子力に対しても、広島・長崎の原爆投下の後も、ビキニ環礁での水爆実験による第五福竜丸の被爆、スリーマイル島原発事故、チェルノブイリ原発事故、さらに福島原発事故などがあった。この戦後70年の間には、朝鮮戦争、ベトナム戦争などが勃発した。未だに戦争の火種が消えない現在、今までの経験と知識を生かして危険な方向に押し流される事がないように、進んで今何を言うべきかを考え、これからも命ある限り精一杯平和を目指して頑張りたいと思う。我孫子市の平和都市宣言30年を迎えての様々な取り組みに心から賛同する一我孫子市民として、平和で核のない世界を目指し頑張る決意である。

### 恩讐の戦中・戦後

内山 明（久寺家 在住）1936年生

戦中は、国民学校（小学校）低学年で、将来の夢は七つボタンの霞ヶ浦予科練にあこがれていた。トラ・トラ・トラの暗号略号の下、日本海軍の真珠湾への奇襲攻撃で、太平洋戦争へ突入したと教えられた。最初は日本軍優勢で戦いが進み、シンガポールが陥落した時は、国をあげて提灯行列が行われ、日の丸の小旗を手に「勝った、勝った」と大合唱した記憶がある。叔父が出征した時も村人達が、「万歳、万歳」と叫びながら見送ったことを覚えている。その時、

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

家族／親戚で記念写真を撮り、小旗を片手に持った姿が映っており、今でも大事に保管している。

戦争も時が経つにつれ、日本軍が徐々に劣勢になり、米国の大型爆撃機B-29の爆音が聞こえるようになった。空襲警報のサイレンが鳴ると学校から帰宅を命ぜられ、近くの神社の森に集団下校し、時間帯によっては青空学級で遊び遊んだ事を今でも鮮明に強く記憶に残っている。当時学校の校舎半分は兵隊さんの寄宿舍になっており、校庭は野菜やイモ畑となっていた。

ある日、けたたましく空襲警報のサイレンが鳴り響き、近くの飛行場が機銃掃射を受け、更に艦砲射撃を受けた。その時の強烈な爆音の響きに耳の鼓膜が破れる思いがして怖かった。その夜、父が工場から帰宅し、「今日射撃された大砲の破片だ」と言って布で包んだ塊を持ち帰って来た。未だ熱いからと言われたが、恐る恐る触れて見たが厚い鉄の塊で、身体に当たったら死ぬと思いゾツとした記憶がある。それから数日後の夜、空襲がだんだん激しくなり、我が家から水戸市方面（12km南）の空が真っ赤に染まり、きれいな夕焼けのような景色だった。翌朝母より、水戸が焼夷弾で街が消失したと聞かされ、その時の光景が今でも脳裏に焼き付いている。

戦争も末期の頃だろうか、B-29の編隊が頻繁に上空に現れ、空襲警報のサイレンが鳴り続き、地上からの迎撃音は聞こえず、敵機が急降下爆撃を加えては海上へ飛んで行ったと後で聞かされた。村の婦人部隊は、竹槍を作り、米国兵が落下して来たら闘うんだと母が言っていた事を覚えている。そんな物でとても勝てないと思ったが、当時は竹槍位しか自分を守る道具はなかったようである。また、家には防空壕が掘られており空襲のサイレンが鳴ると入った。ある雨の激しい日、防空壕に入ったら雨水が流れ込んでおり、とても寒く冷えた身体を母が抱いてくれた事もあり、泣いた記憶がある。

この様な数々の体験も、8月15日、玉音放送があると母から言われた。近所の人々が皆不安そうな顔をして我が家に集まって来た。私達子供は状況もわからず庭で遊んでいた。そのうち親達が下を向いて泣き出し、皆肩を落としていた。何があったか子供にはわからず母に聞いた。日本が戦争に負け、降伏したとの天皇陛下の言葉にガッカリしていた。日本は絶対負けないと信じていた

だけに、悲しみと悔しさで涙がこぼれ落ちた。もうこれで戦争も終わり、恐ろしい思いをしなくても済むと少し安心した気持にもなった。

終戦後は食糧難となり、食物に事欠き、農家の我が家でもイモや大根を食べて過ごした事もあった。都会から食糧を買い出しに来る人が多く村にきた。当時は食料と衣類や時計・貴金属等との物々交換で、互いに助け合ったと母から聞かされていた。以来、お米一粒がどんなに大切で有難いか心に刻まれ、今でも感謝しながら食べている。学校への弁当も、イモを持って来る人も多く、疎開の子は弁当の無い人もいた。食事時間に先生から、イモを分けてあげてと言われ、お互いに分けあって楽しく食べた事は一生忘れない。

終戦後、年月が過ぎるに従って、戦地より兵隊さんが復員し始め、近所の人も何人か帰って来た。私の叔父はビルマで戦病死となり遺品が届けられていた。南方から復員して来た人の話によると、島々の戦いでは多くの戦友を失い、自分が生きて帰った事は恥ずかしく、御国の為に尽くせなかったと悔やんでいた。戦場は、道なき道やジャングルを歩き、水や食料も無くなり餓死していく友を助ける事も出来ず、ヘビやネズミ、昆虫やアリまで何でも食べたとの事でも信じられなかった。それでも生きて帰れたことに、人間の生命力を強く感じた。国内でもあらゆるものが不足し、教科書や通知表もガリ版刷りでワラ半紙だった。又、米国兵に見つかりと連行されると聞かされよく隠れた。

戦後70年を振り返って見ると、小学生時代は勉強もままならず、空襲に怯え、食糧難で多くの犠牲者を出し、国土を焼土化した戦争って一体何だったんだろうか！先人たちの苦勞と努力、日本人の勤勉さが今日の平和と繁栄をもたらしてくれた事を肝に銘じ、絶対に忘れてはならない。もう二度と戦争を起してはならず、戦争の惨禍を再び繰り返さないよう、悲惨な体験を伝え、可愛い子や孫達の為にも、平和な世の中にして行くべく、一人一人が行動し、安心して生活出来る国にして行きたい。

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

### 南冥の島に<sup>いの</sup>禱る

大杉 栄一（青山台 在住） 1922年生

大東亜戦争の終結より70年が過ぎ、周りに従軍経験者も少なくなった今、記録を残して平和の礎としたい。昭和17年の徴兵により、翌年4月1日、静岡歩兵34連隊に入営し、6ヶ月の教育を受けた。ガダルカナル島から撤退しラバウル付近に駐留していた230連隊に派遣が決まり、10月中旬、門司港より軍用船に乗船した。既に下関と朝鮮の釜山を結ぶ関釜連絡船が敵潜水艦に攻撃されるという状況下、船団はジグザグの航路をとり、台湾沖を通過して南に向かった。船倉の兵隊達は一様に船酔いをおこし、食欲のない日々を過ごした。次第に船にも慣れた10月18日、海軍基地パラオに寄港し、上陸した。パラオ本島宿営地で露営生活が始まり、次のラバウル迄の輸送船を待った。11月3日、乗船命令が出て7隻の船団が生まれ、ラバウルに向かった。我々の乗った船は大正時代の老朽船のため船足が遅く、船団を守る駆潜艇は手こずっていた。対潜水艦監視のため、出港と同時に船首と船尾に2名の兵隊が配置され、交代で立哨<sup>りっしょう</sup>した。夜間、折からの月光が波間に砕けるのを雷跡（魚雷の航跡）と見誤り、全員が甲板に飛び出したこともあった。水平線上の島や雲を敵艦と見間違ったりしながら、船団は赤道を越えてラバウルに向かった。入港2日前、船団は敵の飛行機に発見された。薄暮時に、ノースアメリカン社の爆撃機2機が低空で来襲した。兵隊全員が38式歩兵銃で応戦。敵機は曳光弾<sup>えいこうだん</sup>に驚いたか、海中に爆弾を投下しながら退散した。そのとき隊長が発した「撃て！撃て！撃て！」の聲が、今も耳に残る。8日目の夕刻、多くの艦船がひしめくラバウル港に無事入港した。上陸直後に米軍の大空襲があり、迎撃する火炮の閃光を岸壁脇の防空壕から覗き見た。そのとき、戦争の凄まじさを初めて体験した。原隊が駐屯するニューアイルランド島に渡るため、夜間上陸用舟艇に乗り、翌日未明、島に上陸した。そこで原隊に編入され、この島で敵の上陸に備えて終戦まで戦った。

私の属した歩兵230連隊は、昭和14年静岡と岐阜で編成された。開戦時



に香港を攻略後、ジャワ、スマトラを制覇し、当時ラバウルにいた17軍の傘下に入った。その後、ガダルカナル島（飢えに苦しめられ、餓島と呼ばれる）に向かったが、上陸寸前、敵爆撃機に空襲され損害を受けた。上陸後も多くの戦病死者を出し、昭和18年1月同島を撤退。ニューブリテン島とニューアイルランド島に駐留し、島の守備についていた。私達は、この連隊に派遣された現役最後の補充兵であった。日米両軍の死闘が行われたガダルカナル戦の悲惨さは、多くの戦記に書き残されている。当時、私が古参兵から聞いた話も、また悲惨を極めるものであった。昭和18年末頃から、ラバウルへの米軍の攻撃は激しさを増し、毎日、100機、200機の空襲があった。迎え撃つ日本軍の零式戦闘機も、50機、100機と飛び立っていたが、その数も次第に少なくなかった。昭和19年2月にトラック島が急襲されたあとは、日本軍の航空部隊は全機ラバウルから引き揚げてしまった。制空権は完全に米軍に奪われ、無力化されたラバウルは敵機の跋扈ぼっこ（のさばり、はびこること）に委ねられ、日本の内地との連絡は途絶した。島では椰子の林の中に地下陣地を築き、敵の上陸に備えていたが、次第に持久戦の様相を帯びてきた。食糧自給の必要と、敵機の機銃掃射や爆撃を避けるため、幕舎はジャングルの中に移された。炊事も煙のでない枯れ竹を燃やす状態となり、敵機による被害やマラリア等による病人も次第に増えた。糧秣りょうまつや弾薬は、決戦に備えて洞窟深く備蓄した。私も2度ほど、猛烈な下痢をとともなうマラリアで倒れて、生死の境を彷徨したやし。椰子の葉で葺いた丸太小屋の中で、地面に天幕を敷き、毛布1枚で生活した。記録用紙の代用品として木の葉を使った。主食は現地自活で得られる芋やカボチャで、海水を調味料とする原始生活であったが、遂に終戦を迎えた。

武器弾薬を豪（オーストラリア）軍に引き渡した後、昭和20年10月上旬、ラバウル周辺の日本軍総員10万人はニューブリテン島の10箇所ゲートに集結させられた。以降、豪軍の監視下に置かれ、ニューアイルランド島から逐次ニューブリテン島に移動させられ、捕虜生活が始まった。豪軍による日本軍捕虜への食糧補給の申し入れを、南方軍司令官今村均大將は将来日本の賠償負担になるとの理由で断っている。捕虜の中で最高位の同大將は、各部隊に対し

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

て食糧の現地調達と自活自給を命じた。それを受けて、各部隊は豪軍の労務使役の他に農耕作業に従事し、サツマ芋や野菜畑を耕作した。ラバウルに入港する豪軍の物資荷卸作業は、昼夜3交代で行われた。40kgもある缶詰の木箱やセメント袋を担ぐ作業は、体力を要するものであった。豪軍に押収された武器弾薬の海中投棄作業を完了した昭和21年3月頃、ラバウル10万の将兵に復員、帰国の話が伝えられた。私達の歩兵230連隊も、5月3日ラバウルを出港。5月15日名古屋港に入港、上陸、復員し、そこで連隊は解散した。総兵力約3,000名の歩兵230連隊における戦没者は2,800余名、内ガダルカナル島での死者は2,055名であった。祖国と同胞のために命を捧げられた戦没者の冥福を祷る（祈るの旧字体）とともに、南冥の島々（南洋諸島のこと）に想いを馳せ、平和を願う次第である。

### 次世代に伝えたい戦中・戦後の体験について

岡村 英（湖北台 在住）1935年生

#### 1. 東京大空襲

昭和20年3月10日の夜半から明け方にかけてサイパン島から飛来した米軍機B29の100機編隊が三波に亘って下町を中心とした東京大空襲がありました。

死者10万人以上、罹災者<sup>りさいしゃ</sup>100万人に及ぶ大惨事となりました。

私はその時東京の港区麻布霞町に住んでおり新橋駅周辺に落された焼夷弾<sup>しょういだん</sup>により大火災を発生して、折からの春一番に煽られて火は虎ノ門・六本木・霞町・青山・渋谷へと広がって行きました。私は火が迫ってきたので道路わきに掘った蛸壺<sup>たこつぼ</sup>から出て、小さな空き地の木の下に避難しておりました。その時避難している人の中から小児麻痺で動けない「うめ」おばあちゃんが居ないと言う声が上がりました。先に避難してきたおばあちゃんの家族の人はおばあちゃんを背負って逃げることはとても出来ないので火の迫ってきている家に置いてきたと言っておりました。火の迫る家に置き去りにされて「うめ」おばあちゃんは



どんな気持ちでいたのでしょうか。戦争は、親を放置しても自分だけは助かりたいという人間を生みだしてしまう悪魔のようなものです。おばあちゃんを犠牲にしても自分は助かりたいと言う悪魔の心に人を変えてしまいました。戦争は人間から人の心を奪い取るものです。火の中にお婆さんを置き去りにしたのは家族が悪いのでは在りません、戦争が悪いのです。

### 2. 集団疎開

東京の焼け野原を後にして栃木県足利郡三和村の宗泉寺の本堂に集団疎開しました。

食事は質量共に劣悪<sup>れつあく</sup>で朝飯は小さなじゃがいも7・8個に薄い味噌汁<sup>まんえん</sup>一杯、昼は日の丸弁当と言う有様でした。栄養不足による栄養失調、皮膚病の蔓延、不衛生から来るノミ、シラミの為、夜は熟睡できないので慢性睡眠不足となり授業中は何時もうつらうつらしておりました。空腹に耐えかねて台所へ忍び込み盗み食いして見つかって、本堂の柱に縛り付けられて失禁した生徒もおりました。また地元の小学校に通っていたのですが、いじめに遭<sup>あ</sup>いました。都会の生徒は生意気だ、授業中居眠りなどをしているという理由からです。便所はお寺の本堂からわたり廊下でつながれた墓地の空き地に臨時にたてられたものであり、怖いので夜中に行くときは集団で行きました。

昭和20年8月15日に重要な発表があると言われて本堂の下の広場に集められました。ラジオは音声が悪くて何を言っているのかよくわかりませんでした。寮母さんが泣いていたので聞いてみたところ、「戦争は終わった、戦争は負けた」と言っておりました。それを聞いてこれで東京の家へ帰れる、白いご飯を腹いっぱい食べられると大喜びしました。

しかし東京は白米が腹いっぱい食べられるような状態ではありませんでした。見渡す限り焼けた瓦礫<sup>がれき</sup>の山でした。アメリカの進駐軍の兵士が、隣の座席に日本の女性を乗せて焼け跡となった繁華街<sup>しっそう</sup>をジープで疾走している光景に眼を奪われました。

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

### 3. 次世代に伝えたいこと

正しい歴史を正しく勉強して、戦争を絶対にしてはいけません。国際間の紛争は話し合いで解決しなければなりません。軍隊で解決はできません。軍隊を外交の前面に出すことは絶対にあってはならないことです。

### 私の戦争体験

奥山 大和（若松 在住） 1929年生

今の国会議員は、全員戦争の悲惨さを経験していない。現在の安倍政権の右傾化、即ち武器輸出三原則の撤廃改悪、特定秘密保護法制定による言論統制と国民の知る権利の制約、更に、安全保障法案と称する集団的自衛権の行使に依る戦争もできる普通の国になろうとしていることに、危惧<sup>きぐ</sup>を覚える。曲がりなりにも、日本国民が一致して守ってきた憲法9条と70年間の平和とを、あっさりとなし崩し的に放棄しようとしており、日本の将来に暗雲が漂い始め、危険極まりない状態になりつつある。私は、先の大戦の経験から、子や孫が悲惨な目に遭う戦争の道へ向かうことは、絶対に反対である。

太平洋戦争の始まった昭和16年12月、私は宮城県の山村の小学6年生であった。翌年4月、仙台市内の中学校に進学した。しかし、英語の時間は学期ごとに減り、かわりに学校に配置されていた配属将校の指揮による、厳しい軍事教練が増えていった。手榴弾<sup>しゅうりゅうだん</sup>の投擲<sup>とうてき</sup>訓練、銃剣で藁人形を突く銃剣術訓練、石を詰めた背囊<sup>はいのう</sup>を背負<sup>ほふく</sup>っての長距離走と葡萄<sup>ぶどう</sup>前進訓練等、実に厳しい訓練であった。また、音楽の時間は大声での軍歌演習で、いくら大きい声で叫ぶように歌っても、もっと大きな声を出せ、戦場ではそんな声では役に立たない、と怒鳴られっぱなしであった。そして、学校玄関の上にあった「Life Love Light」の校訓は、コンクリートで塗り潰された。従って、真面目な授業を受けたとは言えないまま、二年生の秋から学徒動員令の施行に依り、海軍工廠<sup>しょう</sup>（軍需工場）で毎日機関砲弾の製造に従事した。何度も空襲警報に脅かされ、その都度防空壕に避難しながらであった。

昭和20年の或る日、学生は全員帰宅、夜勤なしとの命が下った。今晚空襲がある、との情報を入手したためであった。但し、これは他人に告げてはならない、万一空襲がなかったら、流言飛語になるとのお達しであった。同じ工場に行っていた兄と一緒に帰宅し、夜に備えて家の床下を掘り、空の石油一斗缶に食料品類と辞書・教科書等を納め、地中に埋めた。夕食後、ゲートルを巻き、靴を履き、何時でも飛び出せる準備をしたまま、兄と2人で玄関に寝ていた。

深夜零時頃、兄がB29の爆音だといひ、姉は公会長宅に走り、兄と自分と2人で「空襲だ、防空壕に退避して下さい」と大声で近隣を叫び廻った。上空を見ると、後退翼のB29の大編隊が見え、やがて空襲警報のサイレンがやっと鳴り出した。近隣の人たちが退避するのを見届けながら、兄と2人で防空壕に向かって走り出したら、上空で花火のように火玉が散って、サーと空気を裂く音と共に、焼夷弾が降ってきて、屋根や道路にカンカラカンと音を立てて散り、燃えだした。

防空壕に飛び込み、頑丈な扉を閉めた直後、爆風と共に物凄い音が扉に響いた。兄は、500キロ爆弾が近所に落ちた、と言った。約1時間後、兄が、爆音が消えた、空襲は終わった、と言ひ、2人で防空壕を出たが、他の人たちは恐怖で誰も動かなかった。外に出たら、防空壕の向かい側の家は跡形もなく、大きな穴が空いていた。青葉城周辺の軍隊が有った所には、大きな火の手が上がり、自分の家側の並びの家宅は全部焼失していた。

防空壕側に残っていた数軒の屋根へ火が付き始めていたのを兄と2人で消し止め、姉が行った公会長宅を見に行ったら、幸い3軒ほど残っていて、姉は罹災<sup>りさい</sup>証明書を発行する準備をしていた。姉の無事を確認してひと声かけてから、市内の叔父夫婦の安否を訪ねて市の中央部に行ったら、馬が焼け死に、火に囲まれて逃げ損なった人々が黒こげになって道で死んでいた。中には、子供を守る<sup>しんさん</sup>心算（心積り）であったろうと思う形で、子供に覆い被さった姿で焼死している人もあった。市街地は完全に焼け野原で、遠くに仙台駅と思われる鉄骨が見えた。叔父夫婦は幸い無事であったが、焼け跡に<sup>ぼうぜん</sup>呆然と立っていた。

叔父夫婦の無事を確認した後、兄は学校の様子を見てくると言ひ、自分は友人の家で休ませてもらふこととして、夕方待ち合わせの時間と場所を決めて別

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

れたが、その後自分は疲れきって眠ってしまい、兄が見に来てくれた時には、約束の時間をかなり過ぎていた。

友人の家ではお兄さんも一緒にどうだと言ってくれたが、彼の家も市内で焼け出された親戚等が避難して来たのでお礼を言って辞退し、地中に埋めた一斗缶から食料品の一部を掘り出して、東北大学の運動場で野宿をすることにした。運動場にはたくさんの人たちが避難して来ていた。適当な場所を見つけて食事をし、そのまま横になって寝たが、夜中に爆音で起こされた。

夜空にB29が1機飛んでいたのを見たら、物凄い恐怖を覚えた。昨晚大編隊で空襲を受けた時は全く恐怖を感じなかったのに、と不思議な感じがした。後になって思えば、8月6日の広島、9日の長崎と、単機で来て原爆（これも、当時の軍司令部は単に新型爆弾と発表していた）を落とし、実に悲惨な状態を招いたことを考えると、1機だけでも凄く恐怖を覚えたのは、本能的に正しかったのだろう。

翌朝、姉の居る公会長宅に行ったら、消し止めた1箇所を公会事務所に使用して、罹災証明書<sup>りさい</sup>を発行することになり、その屋根裏部屋で、兄姉と3人で寝泊りを許された。焼け跡から一斗缶を掘り出して運び入れ、当座を凌ぐことができた。

一応落ち着いたので、翌日兄と2人で学徒動員の工場まで行ったら、工場は市街地から離れていたため無事だった。しかし、もう材料も半端で、生産できるものはなかった。ただ、昼の工場食はあったので、それを目的に通勤した。

昭和20年8月15日、工場にいた者全員が、本館前広場に集合を命ぜられた。そこでは騎馬憲兵隊が見廻っていた。玉音放送とやらは雑音でよく聞こえなかったが、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」だけが聞こえた。

放送が終わると引率の先生に「君たちの任務は終わった。学業に戻るんだ。明日学校に集合」と言われて帰宅した。ところが、学校に行ったら軍隊が使用していたので、改めて3日後に登校したが、学業に戻るどころではなく、仙台の北30キロにある王城寺ヶ原陸軍飛行場を破壊し、瓦礫<sup>がれき</sup>を撤去して農地に戻す土木作業を命ぜられた。冬季までその作業に追われ、真面目に学業を受けられる期間は結局なかった。

戦争で、いいことは一つもなかった。

私の小学校の同級生は、満蒙開拓青少年義勇軍に参加して、異国で死んだ。学徒動員令で勤労学生として工場で働いた同僚も、予科練生の美名に惹かれて行った者はほとんど戦死した。この戦争で300万人の日本人が亡くなったという。しかし、これに倍する他国の人を死に追いやったことも思う必要がある。

戦争は、人間性を失わせ、文化を破壊する。戦争に、人類にとってプラスになることは全くない。戦争は、どんなことがあってもすべきではない。

これが私の<sup>つたな</sup>拙い戦争体験である。

### 次世代に伝えたい戦中の体験について

#### ～戦争は絶対悪で、人々を狂乱させる～

金井 準（白山 在住）1929年生

私が終戦の日を迎えたのは、美保海軍航空隊であった。敗戦2年前に開設されたものであった。第15期第1次募集の海軍飛行予科練習生に15歳で応募した私は、翌年の昭和20年4月にここに配属された。航空隊は兵舎も調わず、民家の部屋を借り上げた民宿に分散していた。朝、飛行場に集まり、飛行機に搭載する電探（電波探知機：現在のレーダー）の設置や修理が仕事であった。

美保海軍航空隊は敗戦色濃い焦りで作られた特攻基地で、主として沖縄戦を対象にしていた。配属されてから週2・3回、特攻で出撃する隊員の見送りのセレモニーにかり出された。それが何ともみすぼらしい情景であった。飛行機に「血桜隊」などの<sup>のぼり</sup>幟をたて、搭乗員は1人で、行きの燃料のみと聞き、子供ながら、これはむごいと感じた。遠くから見送りに参加する私達の大半はうつむき、背を向け、お通夜のようなようであった。世間で思っているような勇壮さは少しも感じられなかった。

さらに、未だに怒りを忘れられないのは、配属されて1ヶ月後の5月末頃、上官から「日本は間もなく負ける。覚悟しておくように。これは<sup>かんこうれい</sup>箝口令（口止めを命じる）だ」と伝えられた。それにも拘わらず、その後も特攻隊の出撃は、

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

回数は少なくなったが続けられた。見送りにかり出されるたびに、その理不尽さに、怒りにふるえた。あたら、若い命をなぜ無駄にするのだろうと。聞けば特攻隊員の前夜の送別会では、何時も荒れに荒れたそうである。それがまともな人間の心情であろう。

終戦の翌日からの隊内の混乱は目を覆う<sup>さんじょう</sup>惨状であった。将校は物資を手当たり次第にかき集め、強盗まがいに部下の金品を奪い、飛行機に積み込み、自分の故郷の近くの飛行場を目指して飛び去った。国敗れるとは、このことかとの当りに体験した。

私は新潟県の田舎町の地主の四男に生まれ、3駅離れた都市の中学に入学した。1年生は新しい世界に入り、全てが楽しく、生き生きとした毎日であった。ただ、小学6年生のころから田舎町でも「あいつは特高だから気をつけろ」と仲間の中で密かに噂が交わされ、暗い、嫌な気持ちを味わった。中学2年生になると世の中の様子が一変した。学徒動員と称して、2、3駅離れた都市の軍需工場に派遣され、やすり掛けや旋盤作業を習わせられた。私は子供の頃から「なぜ、どうして」と常に考える冷めたところがあり、学徒動員を体験し、なぜこんな子供に作業をさせ、そのために教える社員の時間を奪い、本来必要な物を作る妨害をするのだろうかとの疑問を抱いた。

そればかりではない。住んでいる町でも、防空訓練に主婦達がかり出され、バケツリレーはともかくも、竹槍訓練をするのには驚いた。当事者はあれで戦いが出来ると思ったのだろうか。食糧難が始まりかけているのに、無駄なことをまともにやっている。世の中が狂い始めたことを肌で感じ、一抹の不安感を抱くようになった。

中学3年生の春、教頭から海軍飛行予科練習生の募集の話があった。1、2か月経っても誰も応募しなかった。成績上位の数人のグループが、「教頭の息子も同校の3年生なのに、そいつも応募しないのは可笑しいじゃないか、そんなら俺等で応募しよう」となって応募した。七つボタンの予科練に憧れた訳でもなく、軍国少年でもなかった。ただここ1、2年で感じた焦燥感と危機感が動かしたものと思う。応募に対しては家族全員反対、別の中学校の教頭をしていた伯父まで家に来て、応募を取りやめるように説得された。父は6年生の時に



他界、兄たちは東京等に遊学中だった。祖母のすがるような説得にも、「男兄弟誰も兵役に就いていない、1人位兵役に就いても良いではないか」と意地を張り続けた。家族も私の体格が貧弱だから合格しないだろうとあきらめたが、あっさり合格し、軍区の舞鶴港に入隊。その時既に土浦海軍航空隊には練習機がなく、養成が出来ず、配属されたのは、藤沢市郊外に昭和19年5月に開校した「海軍電測学校」であった。第15期第1次募集で合格した中から千人が海軍飛行予科練習生の1期生として入隊した。勿論、飛行機の訓練などなく、体力作りのしごと、1日5時間の座学で高等数学、電子理論の詰め込み授業で明け暮れた。自分の考えなど通用しなくて、ただついて行くだけが生きる道であった。20年4月に各地に配属された。

今、小学校6年生時に感じた暗い空気と同じ臭いがする。今こそ自立した一人ひとりの個の確立をなし、昔の道を歩まぬことを切に願う。権力は巧妙である。それを見抜く力と勇気が求められる。

再び訴える。戦争は絶対悪である。人々を狂乱させる。

### 飛行機雲

神尾 美紀江（湖北台 在住）1937年生

毎年8月15日になると「家族への思い」や「戦争の苦しさ」が忘れられないのです。

私は当時、東京都江戸川区小岩町に両親と4人の姉弟6人で生活をしておりました。戦火が広がり、やがてB29が飛来し空襲警報が鳴るたびに防空壕に逃げ込みました。そして、昭和20年3月9日～10日に東京大空襲があり、東京の中心地は焼け野原となりました。戦火から逃れることはできましたが怖い思いをしていました。家の前の道路にも焼夷弾が落ち、母が消している姿も見ました。近くの学校にも爆弾が落ち庭に大きな穴が空き、本当に怖い思いでした。

4月になり、私は小学3年生に上がり妹が1年生へと入学しました。しかし、

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

戦争がはげしくなって入学式をすることもなく、妹と2人で親元を離れ遠い見知らぬ土地へ学童集団疎開に行ったのです。私は9歳でしたが学童疎開の意味がわからず、遠足に行けると楽しみにしていました。ところが、母は悲しい表情で私達の旅支度をしておりました。別れ際には涙を浮かべておりました。列車は夜行列車で、途中機銃掃射に遭い怖い思いをしながら、山形の赤湯駅に着きました。朝方、外を眺めると真っ白な雪の山々が目の前にありビックリ、遠いところに来てしまった。「お父さん、お母さんに会えない」と突然寂しくなり涙が出ました。山形県長井町の長井屋旅館に入り、学校の先生、寮母さん、先発隊の先輩が迎えてくれました。それから、身の周りのことは何でも自分でいながら妹の面倒を見る生活が始まりました。先輩のみなさんは仲良くしてくださいました。就寝時間になると学童全員が集まって東京方面へ向き「お父さん、お母さんおやすみなさい。皆さんおやすみなさい。」と挨拶するのです。その時間になると上り列車の汽笛が聞こえてきて、私は涙が出て「家に帰りたい」と泣いていました。

4ヶ月が過ぎた8月15日、先生が大事なお話があるからと学童全員が食堂に集められました。食堂では先生をはじめ寮母さん、旅館の人達もいて今までにない雰囲気の中、先生に静かに聞くよう言われ、何だろうと思っておりました。ラジオの音を大きくすると天皇陛下のお話しが始まりました。私は、お言葉が難しいため、内容についてはよくわかりませんでした。陛下のお話が終わると先生をはじめ大人の人達は泣いていました。しばらくして日本が戦争に負けた事を知りました。戦争が終われば家に帰れると思い、私は自分たちの部屋に戻り窓を開け「家に帰れる」と大きな声で叫びました。先生が通りかかり後ろから私の頭をポンとたたき「大きな声を出すんではない」と怒りました。今思うと戦争に負けた事で命を落とされた方々の事を思い不謹慎と思われたのでしょうか。見上げた青空には1機の飛行機が、ゆっくりと真っ白な飛行機雲を引いて飛んでいくのを今でも忘れることはありません。

11月後半に我が家に戻ることができました。母は「これから、もし戦争が始まったら絶対に子どもを手放してはいけない。日本に原子爆弾が3発か4発落とされたら、日本の国はなくなってしまうからね。」と言っていました。生き



るも死ぬも親子一緒ということ。親も子供を離し辛い思いをしていたことでしょう。「戦争は絶対してはいけない」と心から祈ります。

### 忘れ得ぬあの頃

川上 幹夫（船戸 在住） 1932年生

私が4歳のころ、父は除隊となり久方ぶりに家に帰り小作農として田畑を耕し、石下（茨城県常総市）の下駄工場に働いていた。父がいない間、母は農作業をし、子供達を育て朝から晩まで働き尽くめの大変な時を過ごしていた。母がじっとしているのを見たことがなかった。身体をぎりぎりまで酷使していたようだ。

私が国民学校（今の小学校）に入学して数日後のこと、家から1里ほど離れた学校への通学途上に近所の人が自転車で追いかけてきて「幹夫！かあちゃんが死んだからすぐ帰れ。さあ、自転車に乗れ」と言われびっくりして家に帰ると叔母が母に取りすがって泣いていた。背筋がぞくぞくとしこの世が終わったような気分になり、哀しくて母に抱きついた。母の死の前後に幼い弟と妹が死去しており、なんで、こんなに我が家を苛めるのか泣き言を言いたい気分でした。

昭和16年12月8日、太平洋戦争が勃発。毎日戦勝のニュースが流れる日が続きみんな湧き立っていた。除隊から間もない父は翌17年2月にまた招集された。寒い朝のこと。隣近所の人、青年団、婦人会等に送られて出征した。常総線三妻駅たんぼまでの田圃の中を走る砂利道1里を日の丸の小旗や軍歌の絶叫に送られていった。万歳を叫び、威勢よく征ったが、父は小さい4人の子を残してゆくことで胸が張り裂ける思いをしていたのではないのでしょうか。

“駅頭で万歳叫び征きし父はるかニューギニアのジャングルに消ゆ”

父が再招集された後は、18歳の兄を柱に子供4人で農作業をし、なんとか

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

生きながらえていた。ところが、昭和19年12月に兄に召集令状が届いた。父の出征のときの熱狂とは180度異なり兄はひっそりと出ていった。

ついにこの時から、14歳の姉、12歳の私、10歳の妹の3人の心細い生活が始まった。姉と私は学校をたびたび早退し、田畑で農作業をしなければならなかった。主食や野菜は自給自足で、あとは庭で放し飼いにしていた鶏の卵や川で小魚をとってきて凌いでいた。お金はぜんぜん無用の生活でした。近くに父や母の実家はあるものの期待するのが無理な状況でした。

昭和19年になると戦況は悪化し東京を爆撃するB29が編隊を組み悠然と空をゆき、夜の東京の空が真っ赤に見えることがあった。筑波下の飛行場は米艦載機の標的となり、たびたび攻撃されていた。その帰りには田圃に爆弾を落とし、超低空で機銃掃射をするので、田舎といえど安心できる環境ではなかった。

“轟音と機銃掃射は瞬時過ぐP51は超低空で”

日本が負けるなどとは夢想だにしなかったが、艦砲射撃、B29の爆撃、艦載機の来襲等戦争が身近に迫ってくる不安、子供だけの生活の心細さ。随分永い間こんな状況にいたような気分でした。

昭和20年8月15日に日本がポツダム宣言を受諾し、無条件降伏し、戦争は終結した。その翌月、待ちに待った兄が帰ってきた。リュックに毛布を括りつけ何の知らせもなしにひょっこり帰ってきた。兄妹4人嬉し泣きし再会を喜んだ。それから、兄を柱に新しい生活が始まった。

### 私の戦後70年

郷原 武志 (つくし野 在住) 1927年生

昭和2年生まれの私は中学4年生で18歳の時、熊本県人吉市の山間の校庭で、あの「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」という昭和天皇の玉音放送を聴

きました。ラジオから流れるお言葉は事前に重大放送があるとの情報が無ければ聴き取れない程聞き辛いものでした。

当時の学校制度は尋常じんじょう小学校が6年で高等小学校が2年でした。希望すれば六年の尋常じんじょう小学校を卒業して中学校を受験できました。鹿児島県の大隅半島には3つの県立中学校がありました。牛根中学校と志布志中学校それに私の鹿屋中学校です。私は受験料3円を支払って昭和16年にその中学校に入学したのです。当時の制度では中学校は5年制で多くはその上の高等学校に進学・・・

私が入学した昭和16年は神武天皇即位2600年に当るというので街中(国中)が祝賀ムードに包まれました。【紀元二千六百年】という題で「金鷄きんし輝く日本の栄えある光身に受けて今こそ祝へこの朝あゝ一億の胸はなる」の歌がありました。私たち中学生は隊列を組んで街中を歌いながら大手を振って行進したものです。

中学校は2年を終えれば陸軍幼年学校、3年を終えれば飛行予科練、4年で陸軍士官学校或いは海軍兵学校へと進みました。軍の学校を希望しないと非国民?みたいな雰囲気でした・・・

鹿屋市には海軍航空隊が在り昼夜の別も無く飛行機のエンジン調整やら飛び立つ音が轟いておりました。又航空隊の周りには大きな模型飛行機が凧みたいに沢山揚がっていました。敵の電波に鹿屋周辺は守備の飛行機が待ち伏せしているように見せかける為です。

私達中学生と女学生の4・5年生は航空隊に付属する航空しょう廠に動員されました。航空しょう廠には懲用工員とそれを指導する技術将校が働いており、私達勤労学生はその中で働いていたのです。私の配属された工場は無線工場で、飛行場などに駐機する飛行機に電波探知機を装備する作業でした。作業中に敵機の襲撃に遭い、彼方此方に掘られた蛸壺に駆け込んだことも1度や2度ではありませんでした。艦載機の来襲が現実となり防空壕の無い広っぱや道路脇には至るところに人間が1人しゃがんで身を隠す為掘られた穴があったのです。

私の場合中学校で学んだのは4年生の1学期まででした。昭和も20年になると敵の艦載機が頻りに鹿屋にも飛んできて飛行場に駐機するわが軍の飛行機はその姿がなくなりました。付属する航空しょう廠も機能しません。

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

昭和20年夏、私達無線工場で働いた者は中学生も含めて熊本県の田舎の方に移転したのです。私は鹿屋で残務整理の後最後に移動しました。移動途中の電車が林間に緊急停車しました。空襲警報が発令されたのです。列車から降りて林間に隠れました。そこで新型爆弾が投下されたことを知りました。

私達の作業場は小学校の体育館で宿泊はその近くに掘られた横穴です。横穴の近くに建てられたあばら屋で朝食を採り弁当を持って作業場に向かうのです。

あまりのひもじさに工員達は民家に食べ物貰いに出かけました。先に移動した4・5人の中学生達も同じでした。弁当も朝食時に食べてしまうほどです。お昼は食する物がありません。後から移動した私は母が持たせたそば粉で蕎麦掻きを作り後輩に振舞った記憶があります。

幸いにして??私が人吉市に移動して旬日にして8月15日を迎えました。

人吉市でも多くの朝鮮(韓国)の人達が劣悪な条件の中で働いていたのです。小学校に臨時に設営された工場はその日に解散になりました。暴動を恐れたのでしょう。それは私達が働いていた無線工場も同じだったようでした。三八式歩兵銃の取扱を心得ていた私達中学生に治安の為として居残りの要請がありました。私達中学生はそれから1週間ほど実弾を込めた銃を持って街の治安に当りました。任務を解かれて私は生家のある鹿児島県の鹿屋町郷之原に帰りました。ところが集落は蛻もぬけの殻っぽでした。航空隊は郷之原からは1km程です。進駐軍を恐れて男装した女性等を含めた村人達は荷馬車に当分の食糧などを積んで山奥に避難していたのです。

昭和23年、私は国税の職場に就職しました。

昭和62年、東京国税局本所税務署で定年退職し、我孫子に住まいを移したのは昭和54年です。

### 満州より引き揚げの記憶

近藤 恵美（岡発戸 在住） 1931年生

1945年8月9日の事は忘れることはない。満州（中国東北部）の中心都市、今の長春にその前日、突然ソ連軍の空爆があった。授業中に下校令が出て、それが学校と学友達との別れとなった。

8月9日、父の会社から「持てるだけの荷物を持って、30分以内に近くの社宅に集まれ」と連絡が入った。父は5月に召集されて留守。冬に備えて防寒具も持ち、母と弟の3人で家を後にした。しかし、真夏の10分程の徒歩で重い荷物は捨てた。集まった社員の家族はそのままトラックに乗せられ長春駅に向かったが、途中ソ連の空爆の爪跡に車輪がはまり動けなくなった。歩いて駅に着いた時には、既に駅前の広場は多くの会社の家族で埋まっていた。

昼過ぎ、貨車に乗せられ、南へ南へと向かう。無蓋車むがいに乗った人は雨が降るとズブ濡れ、有蓋車に乗った人は閉め切った窓のない熱暑の中、ギュウギュウ詰め状態だった。途中何もない野原で急に汽車が止まると、それはトイレ休憩の合図で、車体の高い満州の汽車は降りるのも乗るのも一苦労だった。そして着いたのは、現在北朝鮮の宣川せんせんで、小学校の講堂に落ち着いた。その後も別の会社の家族団体が次々と集まって来た。この状況は何だろうと子供心に不思議に思えたが、まずは一安心したのだった。

8月15日、重大な放送があるとの事で皆集まって、ガーガー雑音の間に聞いたのが、初めての玉音放送で、戦争の終わりらしい事を知った。子供というのは、親がいれば何の心配もしなかった。しかし、母は今後の進退を決めねばならない。再び長春に戻るか故国日本に向かうか、母は日本に帰る途を選んだ。

翌日、外に出て驚いた。今の韓国の国旗が、軒並みに次々と連らなっている。日本が戦さに負ける事を既に知っていたのか、旗の用意がされていたのだ。考えてみると、日本の国旗の赤の部分に斜めに色を塗り、四方に棒状の線を入れると簡単に出来上がる。戦争に負けることを知らなかったのは、我々日本人だけだった。

帰国への途を選んだグループは汽車（といっても貨車）で南に向かうが、日

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

暮れてある駅のホームに降ろされた。何とそこにはもうソ連の兵隊達が手に手にマンドリン銃を持ちウロウロしていた。その腕には略奪した腕時計がピッシリ。母に「目を合わせてはダメ、下を向いていなさい」と言われ、その夜はそのままホームで眠ってしまった。朝、ソ連兵が一人もいない。訊くと、38度線より南下し過ぎているので北へ移動したとの事だった。これが後で思うと、最大のラッキーな事だったと知った。38度線を越えるのに生死を分けた多くの人がいたのだ。

釜山に向かう汽車に乗せられ途中で降ろされ、山道を歩いた。幼な児を連れた親達は大変だったし、誘導する男の大人達は皆の様子を見守りながら、帰国への道を辿るのは大きな責任があったと思われる。

また汽車に乗り、京城（今のソウル）で途中下車した。街中では品物が豊富に売られているのに驚いた。母はリンゴ、巻き寿司、黒砂糖など買っていたが、その通貨はどこのものであったのだろうか。また汽車に乗り釜山着、ここから帰国船で日本に向かった。

着いたのは博多港だったが、引き揚げ集団の受け入れは初めの方なので、日本側の態勢がまだ整っていなかった。また、なぜか博多から汽車は出ないという。後で聞くと、広島原子爆弾投下が原因であった。船で瀬戸内海を進み、尾道で降ろされ、民家に泊めて貰い、尾道港から船でやっと四国高松の土を踏んだ。いよいよ汽車で終着駅の徳島に着いたら、びっくり、駅舎がない。何と空爆で街中が焼け野原である。父の実家も判からず、母は途方にくれた。しかし、なぜか人力車が2台いて、それに乗り番地の家に無事着いたのだった。父の実家の隣まで焼けていて、焼け出された人達が一間ずつ使っていたが、何はともあれ迎え入れられ、心底ほっとしたのだった。9月の終わり頃だった。

10月1日から転入学、と言っても学校の証明書もなく、胸に付けていた学年章が唯一の証拠であった。焼け野原に残った校舎に 数校が午前、午後と使い分けていた。私は本もノートもなく、言葉も違い、とまどいの毎日だった。

行方のわからなかった父は、シベリアに送られていたことが分かり、1948年無事に帰国。父にとっては、人生再び一からの出直しだった。

戦時中、一般人はマイナスのニュースは知らされず、勝つ事を当然と思わさ

れ、こうした子供時代を経験した私達は、絶対に平和を次世代にバトンタッチして行かなければならない。

終戦の翌年、1946年夏、徳島ではもう阿波踊りが行われていた。

### 太平洋戦争・小学生時代の思い出

澤崎 健（湖北台 在住）1933年生

昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まった。私は尋常<sup>じんじょう</sup>小学校2年生、戦争の怖さはあまり知らない頃です。というのは親からも学校の先生からも「日本の兵隊さんは強い、日本は戦争に負けたことがない」と教えられていたからです。又、開戦の真珠湾攻撃の大戦果は私のような子供でも有頂天になった。

太平洋戦争の前に支那<sup>しな</sup>（中国）への進攻も怒濤<sup>どとう</sup>のごとく、昭和12年蒋介石<sup>しょうかいせき</sup>政権の首都南京<sup>なんきん</sup>を陥<sup>おとし</sup>れ、日本国内の東京・大阪など各都市で「南京陥落を祝う提灯行列（皇軍大勝）」が行われ国民も大いに沸いていました。大人達は将棋・囲碁で相手を見くびる言葉として「蒋政権を相手にせず」と言って手を進め、勝って得意になっていた。

学校の担任の先生は授業の初めに軍歌「大東亜戦争海軍の歌」を、生徒に毎日唱和させた。今でも忘れることなく、歌える。

- |                                |                              |
|--------------------------------|------------------------------|
| 一、見よ 檣頭 <sup>しょうとう</sup> に思い出の | 二、あの日旅順 <sup>へいそく</sup> の閉塞に |
| Z旗高く 翻 <sup>ひるがえ</sup> る       | 命捧げた祖父の血を                    |
| 時こそ来たれ令一下                      | 継いで潜 <sup>くぐ</sup> った真珠湾     |
| ああ十二月八日朝                       | ああ一億はみな泣けり                   |
| 星条旗まず破れたり                      | 帰らぬ五隻 <sup>くはしら</sup> 九柱の    |
| 巨艦裂けたり沈みたり                     | 弾と砕けし軍神 <sup>いくさがみ</sup>     |

「大東亜戦争海軍の歌」：朝日新聞社選定（昭和17年7月・コロムビア）

私は70年過ぎた今でも時々口ずさみます。軍歌でも陸軍軍歌は暗くて重い



## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

感じのものが多く、海空の軍歌は調子が滑らかで明るいものが多いのが特徴ではないかと思います。太平洋南方方面は米英蘭の戦力が手薄だった初期は日本軍がどんどん攻めて行き領土を占領した。シンガポールは昭和17年2月7日に日本軍（山下中将）が上陸、2月15日にイギリス軍は無条件降伏した。シンガポールは「昭南島」と日本名になった。学校は3年生～4年生と昼食は給食（ご飯またはコッペパン・味噌汁・一采）でまずまずだったと思う。5年生になって給食時に「空襲警報」が発令され食はず避難させられたことがあった。戦況は昭和17年半ば頃より日本軍は敗退しはじめていたのは事実のようです。当時良くない情報は国民に伝わらない。

- ・昭和17年6月5日～7日、ミッドウェー海戦で日本軍敗北（敗退の始まり）
- ・昭和17年8月7日、海兵師団がガダルカナル島に上陸、12月まで戦闘が続くも基地を守れず、参謀本部は第八方面軍にガダルカナル島から撤退命令。
- ・昭和18年2月7日、米軍はガダルカナル島に日本軍の「残存無し」を確認して勝利宣言。翌年になってから日本軍もうまくいっていないなと思う情報が発表されるようになった。
- ・昭和18年5月29日、アリューシャン列島アツツ島で日本軍守備隊2650人玉砕。
- ・昭和19年6月6日～20年2月の間にサイパン・テニアン・パラオペリリュー島・硫黄島など玉砕が続いた。サイパン・テニアンは日本列島往復飛行可能距離になり日本の軍需工場だけでなく住宅都市も爆撃するようになってくる。

昭和20年1月早々に小学生は大都市から田舎へ集団疎開することになった。柳こうり小李に荷物を詰めて両親・兄弟と別れて近鉄鶴橋から大和室生寺へ、奈良県でも特に雪の多い山村で軒下に氷柱が下がり気温が零下になる事もしばしば、障子で仕切られた広間にある小さな囲炉裏で暖をとり、震えながら学習していた。朝7時に起床。朝食前に本堂で仏様に「般若心経」（まさに門前の小僧習はんにやしんぎょうわぬ経を読む）を3回唱える。これが毎月21日は弘法大師の命日で何百段もの石段を奥の院までお経を唱えながら上る。お寺の生活で1番苦しかったのは腹ペコになること、竹筒で作られた食器に朝はしゃぶしゃぶの「おかゆ」・たく



あん、昼は麦飯、夜は雑炊、それも1杯きりでおかわりはできない。食べざかりの私にはこれが1番こたえた。こんな辛い生活の中で唯一の楽しみは母が面会に来てくれたこと、1週間に2～3度大阪の家にハガキを出した。母はまだ赤ん坊の弟を背負い食べ物（きな粉・乾パン・おにぎり等）を持ってきてくれた。あんなに嬉しかったことはなかった。「お母さん、この次はいつ来てくれるの」「10日程してからまた来るよ、風邪をひかないように元気でやるんだよ」と言って母は山道をとぼとぼと帰って行った。橋の上から母の姿が見えなくなるまで見送った。

3月13日大阪に夜間大空襲があった。<sup>むろおじ</sup>室生寺から西空を見ると一面が真っ赤な状態、今頃父母は兄弟はどうなっているのだろうかと思うと心配で心配で一晩眠れなかった。翌日、先生から鶴橋周辺は火災を免れ、皆の家・家族も無事と聞かされ安心した。3月末、父は若草山の裏にある母の里へ、学徒動員で大阪湾に近い工場で働いていた身体が丈夫でない中学生の兄を留年させ、2歳の弟と私と母の4人を縁故疎開させた。私は6年生で田舎の小学校に入学、先生はお寺の住職さん、勉強の進み具合は都会よりはかなり遅れている。母の里も年寄りと子供だけ、田畑も作物栽培は殆どない。特に米はなく、ここでも「お<sup>かぼちゃ</sup>かゆ」が主食、南瓜やサツマイモの代食の日も多い。

6月沖縄が米軍に占領される。新聞では“本土決戦、一億総玉砕の気持ちで戦う”の記事が・・・、8月6日広島に原爆投下、8月8日の新聞では「朝日新聞：広島へ敵新型爆弾・落下傘つき空中で破裂・人道を無視する残虐な新爆弾（非人道な残虐性）。毎日新聞：B29広島に新爆弾・落下傘で空中爆発・見よ敵の残虐」とあったのを覚えている。

8月15日正午、玉音放送、十数人の人達がラジオを囲んで聞き入る。内容は聞きとりにくかったが、放送が終わって母は「ああ日本は負けたよ」と言った。「うそ、日本は戦争に絶対負けないよ」と、私は母に食ってかかったのを覚えている。

戦後の人の暮らしは？米軍の駐留が行われても人的な迫害はなかった。気持ちは落ち着いたが食糧や生活必需品は不足、引き続き配給制が取られ主食の米

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

は少ない。代替として配給されたのはメリケン粉（小麦粉）ナンバ粉（トウモロコシ）豆粕（大豆油の絞り粕）、インフレで肉・魚は値上がりし普通の家庭では再々買えない。3～4年間は苦しかった。マッカーサーのGHQは米軍の余剰食品を日本政府の要望に応え気持ちよく放出したと聞いている。昭和20年代後半の朝鮮戦争特需、39年の東京オリンピックで日本の経済は回復し、庶民生活も徐々に良くなっていった。経済白書が「もはや戦後ではない」と表明したのは昭和31年であった。

戦後70年を振り返ってみると戦争はなくなり平和・民主主義の社会が定着、自由にのびのびとした生活、私は12歳まで苦しかったがその後の70年はがらっと変わった良い人生を送っている。それは何と言っても「平和」の一言に尽きる。

### 太平洋戦争時、農村での戦時体験を語る ～農業生産は激減した～

塩野谷 勉（湖北台 在住）1935年生

私も本年80歳、日本の戦争を体験した人々が少なくなっており、貴重な戦争経験の持ち主の1人と思います、

私が小学校4年生のときに戦争は終わりました、記憶も薄らぎ間違いもあるかもしれませんが、純農村地帯で農業を行いながら生活した者から見て、農村も大変苦しい生活を強いられました。先ず農村から若者や一家の働き手が軍隊に徴兵され、働き手が少なくなり、本当に困りました。高齢者や婦人・特に子供・小学生までが農業に従事しました。私の家のように小さな地主では、小作人から土地を返され耕作ができないので、学徒動員の学生などが手伝いに来ておりましたが、田んぼや畑の除草がいつでも満足にできず大変困りました。畑・田圃の草取りを手で苦労しながら行った思い出があります。

一方では軍隊が農部隊として強制的に一部の農地を借地・利用して馬鈴薯などを栽培しておりました。一部の兵隊さんは農家に寄宿しながら働いておりま

した。

最大の問題は、発動機などの機械が利用できなくなったことです。戦中でもガソリン等を利用した脱穀機だっこくきが小さな村にも2～3台あり、皆で借りて利用していましたが、燃料等が軍事用に回され、農村にはガソリン等などは全くなり、戦争末期には、松の根から油をとって軍事用に使用したようです。農村の生産が手作業の明治時代と変わらない水準にまで低下したのではと考えております。特にお米の籾摺りもみす（モミガラもみすの付いた米からモミガラをとる）は子供が行うには大変な重労働ですが夢中で行いました。

食べ物も自給自足で、魚や豆腐などの食べ物を購入することなど余程のことがない限りありません。終戦の年やその翌年頃までは農村でも供出などもあり、小さな農家では食糧は不足で満足に食べることには大変な苦労がありました。私たちはイナゴや川で魚をとり食べました。全国的に見たら食糧確保が何より大きな問題であったと思います。

生活物質が不足し困りました。現在の皆様には想像できないと思いますが、マッチが不足し手に入らなくなり、（マッチの原料が火薬であるので軍事用に回されたのか）附木つけぎと言って薄い杉板に硫黄等をぬったものを使用しました。火種として炭火をかまどなどに保存して火をつけて使いました。着るものも不足し、スフなどが配給になりましたが粗悪品が多く、働く仕事着には使えません。私の家ではでは自家用に綿を栽培し、祖母が仕事着を作りました。

今考えると軍隊・軍事優先で民衆の生活など後回し、民衆は戦争どころではなくやっとその日の生活を維持するにも苦しみました。子供の遊び道具でも鉄製玩具などは（鉄でできていた小さな子供のおもちゃの自動車がありました）全部供出・提供されました。

運搬手段であるリヤカーがタイヤのゴムが無くなり、鉄の輪にゴム状木製の輪を巻きつけた荷車になり、悪路では本当に苦勞しました。戦後、リヤカーが利用できるようになり、リヤカーって本当に素晴らしいと思いました。

戦争は多くの民衆に大変な苦難と苦しみを与えました。平和憲法を守りたく思います。戦後の半年・一年は、ある意味では戦中より混乱し、食糧難などで生活は苦しかった。特にインフレが激しく、戦中の国債は下落し価値は無くな

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

り、新円切り替え・預金封鎖等も実施され生活は戦時中より苦しかったが、希望があり生活が少しずつ改善されてゆくことで生活に励むことが出来、平和のありがたさを知りました。

### けっして忘れない戦争の記憶・平和への努力

澁谷 和佳子（並木 在住）1938年生

「戦争」という言葉を聞くと今でも瞬時に、私が小さかった頃の「恐怖と飢え」の鮮明な記憶がよみがえります。

今から77年前に、私は、神奈川県の旧軍港都市横須賀で生まれました。現在、横須賀市には米海軍横須賀基地があり在日米海軍司令部が置かれています。

父は横須賀海軍航空技術しょう廠しょうに勤めていましたが、昭和18年に海軍に入隊しました。母から「父さんは、軍艦に乗ってフィリピンやボルネオに行っているんだよ」という話をよく聞きました。小さかった私は「父さんは海の向こうの遠い遠いところにいるんだな。いつ帰ってくるのかな」と思い、父が帰って来るのを心待ちにしていたものでした。家は高台にあつて、外遊びのたびに軍港を眺めていたかすかな記憶があります。

4歳のころ。たびたび空襲警報のサイレンが鳴るようになり、防空ずきんをかぶって押し入れに逃げ込んだり、布団をかぶったりする日々が続きました。

昭和18年、5歳の冬。毎夜のようにアメリカ軍のB29爆撃機が姿を現しました。その夜もB29爆撃機の低く唸るような独特の爆音が近づいて来ました。この音は夜空全体を覆い尽くすような恐ろしい音でした。こうこうと夜空を照らす満月の光を浴びて、巨大なB29爆撃機の編隊が頭上をゆうゆうと飛んで行く。軍港が真っ赤に火を噴いて燃えている。私は、母の手を握り締めて震えながら空を見上げたり港を見下ろしたりしている自分自身の姿をはっきりと思い出します。その記憶は今でもドキドキと胸を張り詰めさせるのです。

そのころ、アメリカ軍の爆撃機が日本のいたるところに爆弾を落とすようになっていました。日本は跳ね返す戦力を失いつつありました。父は南方に行つ

たきり帰って来ませんし、無事かどうかも分かりません。私たちは空爆を避けて、母の故郷、山形県天童市に疎開しました。しかし、そこでも空襲にさらされる日々となったのです。

昭和20年4月、国民学校（今の小学校）に入学。毎朝校庭で全校朝礼が行われました。先生の号令で東京の皇居の方向に向き頭を下げます。みんな栄養不足でしたから貧血で倒れる者もいました。教室に戻ってくると、1年生でも直立不動の姿勢で哀愁を帯びたメロディの「予科練の歌」を歌うのが日課でした。戦場で戦っている兵隊さんを想像して涙が出てくるのでした。それからカタカナの勉強が始まるのです。お昼で勉強が終わると弁当もないので（もちろん給食などはありません）家路につきます。帰宅途中で空襲警報のサイレンが鳴り、道路わきの側溝に逃げ込み身を隠すこともありました。昭和20年はもうすでに日本中が戦場状態だったのです。命からがら家に帰ると待っていたのは、ぬかを丸めたぬかだんごのお昼。空腹でも食べられないほどの匂いを今も覚えています。たまに手に入った細いサツマイモはごちそうでした。配給の米はきわめて少なく、ほんの少しの米に水をたくさん入れ、田んぼでとってきたセリを入れて炊いた水のようなお粥はごちそうでした。今では想像できないほど食べるものがなく、みんな毎日空腹をかかえていました。学校で身体検査があるとみんなあばら骨を1本1本数えられるくらいやせこけて骸骨集団のようでした。

その年の8月。住んでいた家の屋根の上すれすれにアメリカ軍の戦闘機が飛んで来ました。空襲警報のサイレンも間に合いませんでした。私は家に逃げ込む間もなく庭を走り、石につまづいて倒れたとき、戦闘機が頭上を飛んで行きました。その時パイロットの姿が見えたように思います。母に目の玉が飛び出るほど叱られ、大急ぎで近くの崖につくられた防空壕に逃げ込みました。防空壕の前は広大な田んぼで、地平線の向こうには航空隊の飛行場がありました。現在の山形空港のある場所です。その地平線上で繰り広げられた空中戦はまるで映画の一場面のように覚えています。航空隊のわずかな飛行機がアメリカ軍機を迎え撃ったのでしたが、黒い煙をふいて次々と地平線に落ちて行きました。私たちは、防空壕からかたずをのんでその様子を見ていました。戦いは終

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

わり、あっという間にアメリカ軍機はいなくなっていました。あの落ちて行った飛行機を操縦したパイロットはもちろん命を失ったでしょう。どんな青年だったのでしょうか。今生きていたら90歳を超えていることでしょう。その記憶はふるえるほどの恐怖と鋭い痛みをとまっています。

8月15日終戦。学校では、教科書の戦争に関係のある言葉や文を墨で塗りつぶす作業がしばらく続きました。1ページが真っ黒になってしまうところもありました。

海軍の父は、数か月後、九死に一生を得て復員してきました。父から聞いた話は、ほんとうに恐ろしいものでした。父が乗っていた最後の輸送船「讃岐丸」が昭和20年1月、アメリカ軍の魚雷を受けて沈没しました。父は、斜めになった船体の舳先<sup>へさき</sup>に駆け上り、そこから救命ボートをめがけて飛び降りました。父は救命ボートの上に落ち、多くの戦友たちは海の上へ。生死が分かれました。船体が海中に吸い込まれると同時に、海上で助けを求める声がピタッと消えました。船体と共に海中に吸い込まれてしまったのです。父は生還しましたが、助からなかった戦友たちに対する負い目を背負って93歳まで生き延びました。今でも父の心の奥深くをもっと知りたいと思うことがあります。

太平洋戦争での犠牲者は、日本で3百万人、アジアでは2千万人を超えたと言われています。戦争は、かけがえのない命を無残にも奪い去ってしまいます。

戦後70年の現在に至っても、世界では戦争がなくなりません。武力によって命が失われています。武力には武力をとという状況をつくりだしています。

武力で戦争を止め平和をつくることはできません。また、平和は誰かがつくってくれるのではなく自分で作り出すものだと思います。戦争の歴史と本質(被害と加害)を学び、実際に戦争を体験していなくてもそれを想像する「想像力」を持つことが、平和のための第一歩だと思っています。

私が戦後を生きて来てつくづく思うことは「平和は努力なしには続けられない」ということです。



### あの戦争で変ってしまった私達一家の生活

島藤 紘子（東我孫子 在住） 1941年生

昭和16年12月12日これは私の誕生日。兵庫県の神戸市で年の離れた兄姉の末っ子として生まれました。この4日前にハワイの真珠湾を日本軍が奇襲攻撃、そのニュースは国内には大歓迎の祝勝ムードで伝えられていたそうです。何不自由なく一家6人が幸せに暮らしていた当時、母はまさかこの3年後にこの生活を離れ夫の故郷へ家族疎開をしようとは夢にもおもっていなかったそうです。これから書くことは、後年、兄姉が皆結婚して我が家を離れて、その頃高校生だった私が老いていく両親との3人暮らしのなかで、母から少しずつ聞き出したことです。

今のようなリアルタイムでのニュースが入ってくるのではなく、大本営発表の国に不都合な事は流れてこない状況のニュースの中で、いきなり米国の大型爆撃機B29が日本列島上空へ飛来するまで、国民は戦争がこんな状況になっていたとは思ってもみなかったようです。

私は生まれてようやく歩きはじめたばかり、女学校で教員免許を取得していた長姉、まだ旧制中学の生徒で、時代の流れに乗って予科練や海軍兵学校に憧れていた兄、そして国民学校3年生だった次姉、皆で暮らす神戸の家にはまだ戦争への恐怖はなかったようです。まわりには海軍の下士官だった母の従兄や、県警の特高（国体護持の為の秘密警察）だった叔父、どちらかという反戦の雰囲気さえなかったようでした。それは、特高警察に身を置いていた叔父が我が家に居候していましたので、少しでもお国への異論を言葉にはできない雰囲気だったようです。父は40歳を超え徴兵検査では丙種合格だったものの、建築士という資格の為に川崎の軍需工場建設の方に採用され、家族とは離れていました。

昭和19年になり日本全体が異常な雰囲気になり、都会の児童生徒は集団疎開が始まりました。我が一家は神戸市内で教師として就職したばかりの姉を親戚に下宿させ、親子4人で父の故郷の伊賀上野へ家族疎開をしました。3歳になったばかりの私はつねに母の背中に背負われていたそうです。不思議なもの



## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

で3才の疎開先の家は今でもすべて鮮明に思い出しますが、大きな石の階段を上って玄関があり、玄関を開けると広い玄関からそのまま真っすぐ突き当たって、お風呂場があったのはどこの家だった？とずっと思いだせないまま、我孫子へ越してきてから母に聞いた時、「え？覚えとったん？それ神戸のあなたの生まれた家やん、ちいぢやな足でヨイショヨいしょと階段を上ってたのおぼえてたんね」と何年たっても関西弁で話す母の驚いた様子が今も目に焼き付いています。

伊賀上野の借家は忍者の里の家の作りで、間口は狭く奥に長く裏の路地へ抜けられる敷地でした。わが借家はその長い路地に3軒の家族が住める建て方の家だったので、これも今では幼児の時の鮮明な記憶で残っています。入口の所の玄関は共通、手前のお宅には少し大きなお嬢さんと子供好きなお婆さんがいて、我が家へ行くまでの間に必ず抱き上げられ話しかけられたのを覚えています。わが家の奥から階段を上り離れのような家には、この年満州から引き揚げてきたご家族が住んでいました。ここには終戦後に5歳になり一緒に通った幼稚園の同級生の男の子がいました。

昭和20年の日本列島への次々の空襲、終戦前の初夏の大阪の大空襲は、神戸で下宿しながら教師を続けていた姉に合服を届けに行く母の背中で遭遇しました。空襲警報の中電車に乗っていた乗客はお互いに助け合いながら駅のガード下まで避難、母親の背中で焼夷弾が空からきらきら落ちてくる様子も記憶にありましたし、そのそばを担架にのせられ血まみれの人が運ばれて行くのも見ました。学徒動員で三重県の軍需工場へ行っていた旧制中学の兄が終戦で戻ってきたときの身に着けていた服やゲートルを全部脱がせて、ついていた<sup>しらみ</sup>虱を日光にさらしていたのも鮮明な記憶です。

そして昭和24年春、その2年前に長姉は父の就職した東京の社長の別荘がある我孫子市の小学校に就職しました。前年の年に手賀沼の女教師水難事故で不足した女教師の補充として赴任していましたので、若い娘に知らない町で1人はかわいそうだと、父が我孫子市に家を建てたのが親類縁者も何もない我孫子という地への引越でした。長姉は今90歳、当時若干21歳、柴崎分教場の主任教師として、その後第3小学校として独立までの何年か、当時の都会の

文化をまがりなりにも同僚の教師と共に子供たちに伝へ続けました。ただ当時の事はあまり話たがらないのですが、すこしずつ聞き出しています。

当時、関西弁はラジオから流れてくる浪花千枝子、花菱アチャコぐらいしか聞いたことのないこの地でのバリバリの関西弁の母が生きていくには大変な苦労だったろうと、いまさらながら明治の女はたくましいなと感心させられています。後に昭和40年代から団地ができ、デベロッパーが宅地造成をして日本中からこの地に越して来られた方が増えましたが、当時どこ行っても「このおっかさんの言ってることわがねえべ?」といわれ外出を嫌がった母の買い物に付き添うのはいつも我孫子の方言を通訳できる私の役目でした。私はといえば家では家族とは関西弁（神戸言葉）、教室では標準語、友達同士では我孫子弁を使いこなすバイリンガルになっていました。

戦後70年といわれ日本が大きく成長し、便利になり、きれいになりました、でも忘れてしまった日本人としての心遣いや、春夏秋冬の季節へのまなざしが少なくなりました。残念ながらこの地へ越した頃の自然はすっかりなくなりました、もう取り戻せない野草の数々、飛んでこなくなった貴重な野鳥たち、手賀沼の景色と水生植物、いろいろあった人生だったけど手賀沼と利根川のあるこの地は嫌いではないです。まさかここで骨を埋めるとはおもっていなかった両親のお墓も伊賀上野からこちらへ移しました。私自身ここで育ち、違和感を持ちながらももう関西人としての習慣も忘れがちな日常です。「人間至る処青山有り」の言葉通り、今ここで誰かの何かの役に立てればと思いつつ古希を過ぎてしまっています。

今、平和を保ち続けてきた日本が曲がり角に来ています。曲がり切ってしまう内に気が付かなければなりません。かつて故郷は神戸ですといっていました、今やふるさとは手賀沼のほitoriですといえそうです。

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

### 零戦のエンジンとすごした勤労働員

庄司 信夫（布佐 在住） 1929年生

1941年（昭和16年）12月8日自宅の布団の中で、日本がハワイの真珠湾を攻撃し、太平洋戦争に突入したというラジオ放送をきいた。この時国民学校（小学校）6年生。登校したら先生方は宿直室に集まって戦況に夢中になり、とうとう1日自習で授業は少しも無かった。当時、私の知っている限りの人は、アメリカやイギリスの圧力を何故はね返さないか、何故戦争をしないのかという気持ちに満ちていた。最初の連戦連勝に日本中が湧きあがっていた。子供心に日本の最終的な勝利を信じていた。

1942年4月に地元の千葉県立長狭中学校（現千葉県立長狭高校）に入学した。入学試験は体力テストと口頭試問で「忠臣は孝子の門より出ず」と文字が机の上に貼られていて、どういう意味か答えなさいと言われた。適切に答えたのか、無事に入学出来た。

中学での嫌な授業は何と言っても教練（軍事訓練）だった。週3時間、軍隊直属の配属将校が厳しい指導を施した。軍人勅諭は勿論暗記させられ、訓練としては不動の姿勢と敬礼、行進を毎日行った。「気をつけ！」と号令がかかったら、両踵と両膝をピッタリつけ、爪先は60度を開き、手の指先はしっかり伸ばすよう指導された。冬、指先が伸びないとサーベル（携行の軍刀）でパチッと叩かれた。1944年9月1日、中学3年生で横浜の軍需工場に勤労働員になった。横浜市内の中学生や東京の大学生と工員1万人が働く零戦エンジンの製造工場で、日本一の生産を挙げていた。運転検査課に配属され、油まみれになって試運転を行った。徹夜するとき、12時に夜食が食べられるのが大きな楽しみだった。

1944年の終わり頃から敵の空襲が激しくなってきた。朝早くの空襲でエンジンセットからエンジンをはずし、トラックにのせ命からがらトンネルに逃げたのも屢々だった。こごえた手で冷たいスパナを使うときに、スパナはずしをおこしたとたんエンジンに手をぶつけて、顔をしかめて我慢したものだ。お前たちの命よりもエンジンの方が大切だと言われていた。

1945年のはじめ配属将校が寮に来て、「もう日本は勝つ事が出来ない。町を歩くと海軍の軍人が沢山居るが、彼らには乗る船が無いのだ」と真顔で言うのである。憲兵（兵の秩序を取り締まる）に聞かれたらどうするんだろうと思ったが、その頃には憲兵の威力もなにも無くなっていたのだろう。

1945年5月29日、昼近く空襲警報で横穴の防空壕に逃げた。伊勢佐木町あたりにはもうもうたる煙が上がっていた。そのうち、どこからともなく、ヒューンというすごい音が迫ってきたので思わず腹這いになり、目と耳を手で塞いだ。防空壕の中の人はいずれも同じ姿勢をして爆風をそらした。

1945年7月半ば、工場の一部が木更津の航空<sup>しょう</sup>廠近くに疎開する事になった。横浜に居たときは3食まがりなりにも食べられたが、木更津ではひどいものだった。朝、すいとん、昼はゆで大豆が小さな湯飲み1杯、夜は欠食という状態で生きているのがやっとだった。それでも文句を言わずに堪え何とか工作機械を据え付け、明日から操業という時に終戦になった。この1カ月間は白いご飯を腹一杯食べて死にたいというのが最大の願いだった。玉音放送の前日には地下工場の前で引率教師を含めて全員が空腹で動けなくなり、甲板士官（監視官）に大声で怒鳴りつけられた。働きたくてもどうしても体が動かない状態で、育ち盛りの中学生にとっては地獄の苦しみだった。

玉音放送の内容はソ連が侵入してきたので多分宣戦布告をするというものだったろうと思っていた。ところが昭和天皇のお言葉がさっぱりわからない。しかし、日本は負けたのだと直感した。頭がボーとなって一時虚脱状態だったのは私1人ではなかった。その後ですぐこれで鴨川の家に戻れると思った。しかし切符は買えるか不安になった。引率の先生の手配で17日にやっと帰る事が出来た。帰りの車中で友達と将来について話し合った。空襲が無いので夜は電気をつけて良いというのは明るい話題だが、これからの日本はどうなるんだ、俺たちはどう生きれば良いのだ、鬼畜米英と言っていた敵が日本をどうする気なのだろうと不安にかられたが、我が家に帰って両親や兄弟に会ってはじめて落ち着きを取り戻した。

戦後の日本の<sup>さんじょう</sup>惨状はまさにどん底状態だった。そんな中からこの日本の再建は我々自身がやらなければいけないのだという自覚が芽生えてきた。そして懸

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

命に努力した。戦後70年、平和な日本を熟々<sup>つくづく</sup>有難いと思う。今の平穏な社会の永続を願ってやまない。

### 70年以上消えない悲しい色の記憶

水津 敦子（寿 在住）1941年生

昭和16年2月生まれの戦中戦後の記憶はとぎれとぎれである。それでもいくつかの強烈な印象と体験は、今なお心の底から時折顔を出す。例えば・・・

#### 1 <sup>くれないいろ</sup> 紅色のごはん

---

戦争も末期になると、戦場の兵士も、銃後の一般人の多くも苦労したのは食料だった。国家予算の8割は軍備に費やされ、国が国民を養う力はなかった。生活の担い手となる働き手の大半は戦場に送られ、倒れた。四面を海に囲まれた海洋国家の日本なのに民間漁船まで軍事船として軍に徴用されていた。多くの方はわずかな庭を畑とし、川や沼や海、あるいは山野で、日々の糧<sup>かじ</sup>を得ていた。

昭和18年末か19年の初頭だろうか。大阪から母と姉と私は父の縁戚の我孫子駅前<sup>かさく</sup>の家作（借家）に疎開してきた。そんなある朝のことである。2軒の家作が共同炊事する井戸端で、七輪で焚かれていた他家のお釜の中を何気なくみて目を丸くした。鮮やかな桃色のごはんが目に飛び込んできたのだ。3歳の私は素晴らしくおいしいそうに見えた。急いで家に戻り、勝手口から「ねえお母ちゃん、口紅みたいなごはんだよ、ピカピカして、おうちでもあのご飯作って！すごくきれいでおいしそうだよ」と母をせつついた。

母は黙って私の手を引っ張って家の中に入ると、「シッ」と唇に手を当てた。その時、初めてその美味しい真紅のごはんが、お米ではなく、雑穀の高梁<sup>こうりやん</sup>と言うものであることを知った。白米の代わりに食べているのだから、きれいで食べたいなんて言うのはダメだと叱られたのだ（それでも手に入れるのは大変だったという）。でも黒いお釜の中で、鮮やかな、紅色の粒粒は70年たっても私

にはひどく美しく思える。いくらボソボソして食べられたものではないと聞いても、今でも夢に見るほど、我慢ガマン一色の生活の中で輝いているものだった。

### 2 国防色のゲートル

私が生まれると間もなく、従軍記者として上海に派遣されていた父が昭和19年5月ごろ帰国した。職業柄機密情報を得て、大阪空襲が近いことを知ったのだろう。昭和18年に我孫子市に疎開するようと大阪本社の電信で母に知らせた父が、薄汚れた身なりで、リュックを背負って小さな家作の玄関に立っていた。3歳の目にはなぜか国防色の毛羽立ったゲートルだけが強烈に映っていた。国防色。父の脚にきつく巻き付いた国防色のゲートル。それが私に父を認識させた最初のものだった。

敗戦の色濃い大陸から逃げるように島伝いに小舟でひと月近くかかって日本に帰ってきたのだという。突然の父の帰国は母や姉をとんでもなく喜ばせた。でも私には、飛び跳ねるように喜んだ記憶にはない。ただ玄関の三和土たたき（土間）にニョキッと立っている2本の棒のように細い脚にしっかり巻かれた薄汚れた国防色のゲートルだけしか記憶にない。何しろ父の顔を知らなかったのだから。

ただ、国防色は非国民でないことを証明する日本国民の制服の色だったから、私には玄関から部屋に上がった男性が確かに日本人であること、数少ない父という人の写真の人にそっくりなので、父と認めたのだ。以来、敗戦するまで父はいつも国防色のゲートルを巻いて、国民帽をかぶって出勤していた。誰もが国防色を身に着けていたものを、父もつけていたことを嬉しく感じていた当時の自分をひどく哀れに思うのだ。

### 3 白い病衣の傷痕軍人たち

小学校を卒業する年のことだから、昭和27年のことだ。当時の我孫子では日常的な生活用品でも手に入らないものが多かった。おそらく修学旅行の準備の品を見つけに母は私を連れて上野のデパートに行ったのだろう。何を買ったかは覚えていない。強烈に頭に焼き付いているのは、乗ったSLの車内で見た



## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

数人の男性のことである。彼らは、お揃いの白い丈の長い着物を着、国民帽をかぶっていた。1人は松葉つえを突き、もう1人は、腕を三角巾でつるしていた。ともに首から義捐金ぎえんきんと墨書ぼくしょされた箱をぶら下げていた。

隣の車両から入ってきた彼らは、直立して「お願いします」と言った。そして一礼した。その時初めて私は、傷痍軍人の存在を目にした。傷痍軍人がいることも知ったのだ。戦時中、食事のたびに、「お百姓さんありがとう、戦地の兵隊さんありがとう」と言って、勇ましい姿を想像していたあの戦地の兵隊さんが彼らなのだ、と思うと何とも言えない、切ない複雑な感情が湧きあがり、私の脇を通り過ぎる彼らをまともに見るができなかった。

あの時、目を伏せた後ろめたさがあったからだろう。修学旅行先の中禅寺湖畔で同じような、白い長い病衣を着て、箱を首から下げ、ハーモニカを吹いて人目を引いている傷痍軍人を目にした時、なけなしのお小遣いを箱にそっと入れたのもその複雑な感情がなさせた行為だったにちがいない。以来、彼らの白衣の姿は中学校へ通う列車の中でもちよくちよく目にしたが、高校に通う頃にはいつの間にか出会うことはなくなっていた。

戦争が終わって70年、年を重ねても消えない記憶というものがある。これからの子供たちには、戦争によって悲しい記憶を抱える人生を決して歩ませたくないものだ。

### 私の4回の戦災体験について

鈴木 正吾（白山 在住）1933年生

私は昭和8年に東京の新橋で生まれました。

小学校6年生の夏休み（昭和19年8月）の終わり頃に、次第に本土への空襲が行なわれるようになり、一斉に「学童集団疎開」が始まりました。3年生以上の居住地区の近い者で班編制をして、リュックサック、水筒、防空頭巾をしっかりと身に付けて、栃木県の塩原温泉の3つの旅館に別れて疎開しました。宿舎は温泉旅館でしたので気持ちのよい温泉に入れて幸せでした。しかし、食



料事情が悪くて毎日のように「芋雑炊や重湯」を啜すすっていました。

疎開生活は、朝は清掃に始まり朝礼が終わると登校して授業、午後は山登りで山菜採りや遠距離行軍などが行なわれ、キツイ毎日でした。そんな中で何ヶ月に1回、家族との面会があり、栄養剤やお菓子の差し入れがとても楽しみでした。



平和を求めて —港区学童集団疎開—  
(発行 港区教育委員会 平成2年3月20日)  
29ページ 校庭での出発式の写真

翌年の3月6日に、6年生は卒業と進学のために「集団疎開」から離れて帰京することになりました。上野で省線（今の山手線）に乗替えて神田付近に来た時、電車から見える光景は一面の焼け野原で、見るも無惨でした。果たして自分の家は大丈夫なのか心配でした。

帰宅して3日経った9日の夜半に空襲警報が鳴り響き、空を見上げると沢山のB29爆撃機が飛来し、何処かの火災の炎を反射して機体がオレンジ色に見えました。その火災とは、本所・深川の大火空襲でした。父は隣組みの班長をやっている関係でここを動けないので「姉と2人で母の位牌を持って安全な所に避難しろ！」と言われて、増上寺方面に向かいました。途中歩道のアチコチに作られた防空壕に立寄りながら、赤羽橋の先の郵政省貯金局まで避難しました。翌朝戻って来ると、自宅はおろか周囲は“焼け野原”でした。残った物は地下の防空壕に入れておいた瀬戸物くらいでした。（戦災体験1）

それから父の知り合いのお宅にお世話になり、間もなく再び空襲があつて、河川の脇の強制立ち退きの跡に作られた防空壕に避難したところ、壕から5mの近くに爆弾が落ちて生きた心地がしませんでした。爆風により壕の入り口が

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

破壊されて出るのに苦労しましたが、命拾いをしました。それと同時に、私たちが寄留していたお宅の2階が爆風で跡形もなく吹っ飛ばされてしまいました。  
(戦災体験2)

そこで滞留も許されないので、父の郷里の愛知県豊橋に親戚を頼って疎開しました。親戚に暫く寝泊まりしながら、市内に借家を物色して移住しました。転校した中学校では授業はほとんどなく、畑仕事をして麦やサツマイモを作ったりしました。ある日、市内を歩いている時に警報も鳴らないのに、敵の艦載機が1機低空飛行でやって来て、歩行者を機銃掃射してきて、私は危うく難を逃れました。(戦災体験3) それから3ヶ月も経たないうちに、豊橋でも空襲があり借家も燃えてしまいました。(戦災体験4)

そこで再び別の親戚宅に転がり込みました。その内に豊橋も更に空襲が激しくなるのではないかと想定して、親戚の知り合いの山奥へ(愛知県北設楽郡)再び移住をしました。この地は夜になると“蛍”の宝庫で、空襲とはほど遠い安住の地でした。

ある時、空襲警報が鳴り、空からビラが降って来ました。回収して読むと「これ以上ムダな抵抗は止めて、降伏すべきだ!!」と書いてありました。これを機に、豊橋市内に戻り借家をして、1時間の徒歩で再び学校に通い始めました。

そして昭和20年8月15日正午少し前に空襲警報が鳴り響き、自宅前の防空壕へ入ろうとした時に、天皇陛下の玉音放送がラジオから聞こえて来ました。その最中に東の方を見ると、爆撃による大きな爆発風景が見え、方角からして豊川の海軍工廠しょうだと思いました。思えば女学生などが働きに行っているしょうちよくと聞いており、事もあるうに終戦の詔勅しょうちよくが読まれている最中に爆撃に合うとは、何たる悲劇でしょうか。

父は、いずれ上京して仕事をしようと、取り敢えず単身赴任して職探しに上京しました。それから1年位して、私の高校入学時期に合わせて、家族揃って東京(港区芝)へ移住し、父の働き先の工場の一角に寄宿させてもらいました。

ここを起点に、芝浦（間借り）～江東区北砂町（持ち家）～相模原（住宅建設）に転々と移住しました。江東区に移住する時は、貧乏なため大八車を借りて雨の中を2往復しました。シンドイ引っ越しでした。数えてみると、生家を焼け出されて我孫子へ落ち着くまでに、引っ越しを丁度20回重ねたことになります。

昭和20年3月の卒業時に、戦時下の混乱で生徒が離ればなれになって卒業式が出来ず、爾来<sup>じらい</sup>46年後（平成3年）に創立以来114年で廃校になって模様替えとなった港区生涯学習センターで改めて卒業式が行なわれました。1人1人壇上に上がって卒業証書を授与され、感慨無量でした。

時あたかも国会では「安全保障関連法案」が審議されています。戦争の無い平和な世界を願って止みません。

### 終戦から引き揚げまでの思い出

高野 正秀（青山台 在住）1933年生

終戦の時、私は朝鮮の東海岸北緯38線の約3km北にある襄陽（ヤンヤン、終戦時は北朝鮮で現在は韓国領）にいた。当時6年生。海岸で海洋少年団の合宿訓練をしていた。終戦の1日前であったか、海上を多数の日本の輸送船団が南下するのを見て、手旗信号で「武運長久」とか「必勝祈願」などを送ったが応答がないので、遠くて読めないのかと思っていた。8月16日学校から迎えが来て、前日に日本は戦争に負けたと知らされた。玉音放送など知る由もない。

私達が住んでいたところは、襄陽の町から10数km離れた鉄鉱石を産出する鉱山であった。約200人の日本人と何千人かの朝鮮人等が3交代で鉱石を産出し、日本の八幡製鉄所へ送っていた。社宅へ戻るとすぐにラジオを没収され、以降は何の情報も得られなくなった。会社の広場では、大極旗や赤旗が立ち並

## 第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

---

び拡声器が大きな声を上げていた。また山の上に見えていた神社の鳥居が切倒されたりした。私の父は電気技師だったので、身の危険はあまり感じなかった。しかし、当時、鉱山の人事労務管理監督を担当した日本人は、日夜天井裏などに転々と身を隠し、リンチ暴行を逃れて早々に鉱山から脱出した。

現地人による保安隊が結成され、日を置かず8月18日にはソ連軍が進駐してきた。会社の倉庫からのソ連兵の略奪が何日か続き、それが終わると現地人達の持ち出しが始まり時々銃声も聞こえた。夜間、保安隊を伴ってソ連兵が家の中を物色し略奪を行ったので、若い年頃の女性は髪を切り顔に墨を塗り胸にさらしを巻いて男装をして身を固くしていた。ソ連軍の司令官が初めてジープに乗って進駐してきたとき、日本人は全員整列して両手にソ連国旗を持たされ、ウラー・ウラー（ロシア語で万歳万歳）を三唱させられたことを今でもはっきり覚えている。それから何日も経ずに、司令官の妻だという金髪の女性が歩く姿を見てまた驚いたものである。もちろん、監視する高台には、自動小銃を構えた警備兵が立っていた。

ある日、家財の中で日本に持帰りたいたいものがあれば荷造りをして置くよう言われ、家具などを世話になった現地の人達にあげたりしていた。日を置いて、突然、住んでいた社宅から短い時間内での立ち退きを通告され、鉱山労務者達が使っていた泥壁の南京虫やヤモリのいる労務者住宅に移された。荷造りをした家財はどうなったかはわからない。ソ連兵が進駐して来たあと、日本人の身の安全は保障し、食料も1日米穀類で2合は配給するから脱走はするなと言われていた。何の情報もない不安な日々を送る中、早く日本へ帰りたいとの思いから10月のある日、約20人で脱走を図ったが、なぜか事前に発覚し準備していた持ち物を没収された。父が連行されたが、幸い1週間の労役をさせられただけで家に戻ってきた。

11月になり冬の寒さの前に、再び早く日本に帰りたい気持ちが強く湧き、朝鮮語の堪能な郵便局長のもと約40人で集団脱走を計画した。11月28日

夜、日本人に好意を持つ現地人の案内でグループに分かれて山へ逃げ込んだ。最初にたどり着いてほっとした所は、小さな小山がいくつもある墓地の中で月が煌々と輝いていた。それからは暗い山道を誰にも見つからないように黙って歩き続けた。月明かりのもと38度線を通る道が下に見えたときは、ソ連兵が近くにいないか非常に緊張したことを思い出す。

無事38度線を越えて米軍占領地域に入ってほっとしたものの、安心は出来なかった。ある村外れで白衣の傷痍軍人が立ちほだかり、自分は日本の戦争で傷ついたのでから何等かの償いをしろと脅かしを受け、金品を盗られる人たちが出たりした。それでも途中親切な農家に泊めて貰ったり、牛車に荷物を載せて貰ったりして歩き続けた。

最後の目的地、京城（ソウル）に着いた日は、どのくらい距離を走ったのか。夕映えの中、チャーターしたトラックの荷台から見えた山並みが目に浮かぶ。あの山の向こうが京城だよと告げられた。京城（ソウル）に着いたのは12月2日で、襄陽脱走から5日目であった。

到着した日の夕刻、京城の東本願寺に収容された。収容所では、大釜の底に出来たおこげを奪い合って食べた。引揚げ列車の順番を待ち、京城到着後4日目の夜、米軍の警護付の貨物列車に乗車した。父は自分たちの荷物がほとんどなかったので、京城在住の引揚者の柳行李ごうりを運ぶ仕事を請負っていた。夜半、列車が途中で急停車した。現地人の強盗が襲ってきたとのことだったが、銃声が聞こえた後しばらくして動き出し、翌朝無事釜山（プーサン）に到着した。

その日の内に、引揚げ貨物船“北鮮丸”に乗船した。玄界灘には未だ浮遊機雷あさもやが浮いているので危険だと聞かされていたが、夜半は船倉で過ごした。朝靄が晴れていく中、日本の陸地が見えてきた。港に近付くと、爆撃で沈められた船舶が何隻も沈んでいた。それを見ながら博多港に上陸した。12月7日、上陸すると直ぐに、頭から身体中真白になるほどDDT（現在は薬害のため使用不可となっている）を振りかけられ、その後、帰国手続きをした。

この朝鮮における経験は、父が4年弱、私達家族は3年弱の苦労を味合わされた歳月だったのである。